
冒険者の心得その1生きるべし！

三歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険者の心得その1生きるべし！

【Nコード】

N6066X

【作者名】

三步

【あらすじ】

ケインとラルゴ、神様から”アビリティ”と呼ばれる特殊な力を授かったことで、冒険者として生きていく道をえらんだ2人の少年達の友情物語。2人の行く手には多くの困難とツツコミ要素が待ち受けています。

悩みながらも前を向き、自分の限界を決めてしまわないで突き進む少年を描いた冒険劇を目指します。ただし熱血と言うより温血（平熱±1度）です。

初投稿です。1話ごと短めに書いてく予定です。常にハッピーエン

ドを目標します。

ケインがキライだった日（１）

新しい年を祝う祭りで、村の広場は賑わいをみせている。あちらこちらで大人達も子供達も楽しそうにしているのが．．ケインにはなんとなく面白くなかった。ケインはその日が嫌いだった。

この世界”アートフィル”では神々や精霊が新年を祝うこの日に特別な”何か”をプレゼントしてくれる、と言われている。誰に何をくれるかはよく判らないらしい。しかし、何かを授けてくれるのは決して嘘ではない。この村にも１人授かった者がいるのだから。その人は小柄な女性だが、村一番の力持ちだ。

「よう、ケイン。お前は食わないのか？」

後ろから声がかかった。振り向くと自分と同じ年のラルゴが焼き鳥の串を数本持つて近づいて来た。一本をケインに差し出す。

「サンキュー、ラル。」

串にむしゃぶりつく、村特性のタレがなかなかだ。ラルゴは亜麻色の髪をしている。甘いマスクと人懐っこい性格で同年代の女子からおばちゃん達にまで人気がある。ケインは黒に近い灰色の髪で顔は悪くない方だと思っているが、女子にはさっぱり縁がない。ラルゴ曰く、「目じから」がハンパでないとのこと。ようするに目つきが悪いということなのだろう。

「今年こそ、”アビリティ”貰えるかな？１５歳で貰えるとすんごいらしいからな、俺たちスペシャルイヤーだよな、今年は。」

”アビリティ”とは神々などから授かる力の通称である。そしてラルゴが言ったことこそがケインがこの日を嫌っている原因であった。

ケインがキライだった日（2）

「神様もラルになら今年はくれるかもな。」

出来るだけ、出来るだけ感心が無い風を装い返事を返す。しかし、付き合いの長いラルゴには無駄のようで少し意地悪な、それでいて人懐っこい笑みを浮かべて、

「強くなりたいんじゃない？無かったのかい？」

さらりと、直球ど真ん中ストレートに聞いて来た。

そう、ケインは強くなりたかった。だが、それを神頼みにして安易に手に入れることを願う自分を嫌悪していたのである。今日という日は己の力のなさ、心の弱さを最も強く感じてしまう日なのである。

「そりゃそうだけど…ってラル？」

こいつ相手に強がっても無駄だと返事を返そうとしたそのとき、ラルゴの体に異変が起こるのが目に入った。そして同時に、ケインも自分の体に異変を感じた。

ケインがクライだった日(2) (後書き)

iphone用キーボードゲットしました…

ケインがキライだった日(3)

何が起っている！

ケインは地面にうずくまってしまった。いうことを聞かない身体を懸命に動かそうとする。まるで金縛りにあっているように自由にならない。玉の汗が全身に浮かび下を向いている顔のあちこちから滴り落ちるのを感じた。

と、頭の中に大きな声が鳴り響いた。

(先に見つけたのは私よ！)

(早い者勝ちだろ！先に印付けてやるぜ？)

(…まーまー、落ち着いて。取りっこよりわけっこの方が楽しいよ。)

(…その手があったか？)

(冗談だったんだけど…まあいいか、…じゃ僕も。僕はこっちのにするね。)

おーい、あんた達コッチのこと考えてないでしょう？と、つつ込む前に意識が遠のいてきた…。

—————

(…？僕は？)

一瞬、今どこで何をしていたのか記憶が途切れていて理解できなかった。

周りを見回すと、新年を祝う祭りの景色が目に入り、和やかな賑わいに満ちているのが確認できた。

(さっきからほとんど時間が経っていない…みたい。)

今度は体を確認するが全く変わった様子は無い。

「そつだ！、ラル？」

ラルゴが膝をつくのを見た記憶がかすかにある。思わず叫んで周り

を見渡すと、すぐ近くに大きな犬がいた。

その犬は亜麻色の毛並みが美しい大型の犬で、昔ラルゴの家で飼っていた犬にそっくりであった。ただしその顔というか、瞳に見覚えがあった。

「…お前さん、もしかしてラル？」

間違えていたら恥ずかしかったので小声で話しかけると、

「ワン！」

としつかりした鳴き声が返ってきた。

「犬でもイケメンか…、あ、犬だからイケワンか。」

僕の軽口に、何を思ったかラルゴ（犬）はのしかかって来た。

その瞬間、全ての時間の流れが遅くなったような気がした。いや、明らかに遅く感じる。そして、ラルゴ（犬）を軽くかわす。

着地したラルゴ（犬）が不思議そうに首をかしげた…。

「どうやら、お互い神様達から力を授かって、…アビリティ持ちになったようだね。」

「ワン！」

一鳴きしてラルゴ（犬）が頷いた。

ラルゴの尊敬する友人

ラルゴが話します。

新年を祝うお祭りが終わり、村がまた普段の装いを取り戻しつつある、そんなある日、ラルゴは村長の家にいた。

あの後、苦勞してなんとか人間の姿に戻ることができた。そしてアビリティのことをケインと相談し、まず家族に打ち明け、それからアビリティについて教えを乞うためサラさんのところに話をしにいった。なぜなら、サラさんは村唯一のアビリティ持ちであるからそうしたら、サラさんからこのことは村全体に関わることだからと村長に報告した方がよい、と言われ村長宅で関係者を集めて話し合うこととなった。

ケインの家からは母親と兄が、ラルゴの家からは両親が、それに村長とサラさんが同席している。

村長（昔から名前と呼ばれているところを聞いたことがないので名前を知らない）はラルゴの知らない話をたくさんしてくれた。

この村にもう少ししたら王国官僚（今でいう国家公務員のこと）が来て年に1度の視察を行うこと。作物の出来柄や村の税金の使い道とか、いろいろと調べられること。その時、村にはアビリティのことを報告する義務があること（というかそのために新年の祭りの後にくるようになっていくらしい）。

「つまり、王国に2人のことを報告しなければいけないのです。そして2人は王都に赴いてアビリティについて詳しく調べられると思います。」

長い話のため村長が大きく息を乱して話が中断したのを見計らって、サラさんが一番大事なことを伝えてくれた。

「ここは王直轄の村なので、2人とも将来的には王国に仕えるように言われると思います。と言っても、いきなりではなくまず冒険者

を勧められるようです。その功績や行動、アビリティの内容によって王国のスカウトの選択肢が決まるようです。また、アビリティ持ちは冒険者になっても外国には出国出来ません。ちなみに私は冒険者にも王国へ仕えることもしませんでした…私は戦うことが怖かったから。そのため、村へ帰ることを認めてもらえましたが、この村から外へ出ることは禁じられました。このことは村の人は誰も知りません…。」

サラさんは、どこか怯えたように話してくれました。どうも、王国はアビリティ持ちに敏感のようだ。

それはそうだろうとラルゴは思う。例えば、自分のアビリティは”チェンジアニマル（動物変身）”らしいが、それを上手く使えばかなりすごいことが出来ると思う。

ケインの母親と兄は、かなり真剣に聞き入っているし質問も返している。元々ケインは家を継ぐことが無い立場なので、大きな街にでも出て身を立てることを視野に入れていたみたいだった。ケインの家族はケインが王国に雇われるなら文句は言わない、というより喜ぶであろう。ただ、ケインはこの村に愛着を持っている。彼の父親はモンスターの襲撃から村と家族を守るために命を落としている。直接本人から聞いたわけではないが、ケインが強さを求める理由の一つだろう。どうするつもりかな？

ケインは家族よりずいぶんとのんきな顔をしている。もう、これからどうするかを心に決めているのだろう。普段は好きなクッキーとプリンをどちらから食べようか悩むようなヘタレだが、時々信じられないほど決断力を見せる。

ふとケインと目が合った。不埒な事を考えていたのをばれないで欲しいと思う。あいつはそこらへん異様に鋭いからなと心で考えていると、

「ラルのおちゃん、ラルはどうするつもり？…ラルが冒険者になるなら僕が守るよ。」

いきなり我が家の今一番の問題に触れてくれやがった。ラルゴは長

男で跡取り、しかもラルゴの家はこの村最大の農場と農作業者を抱えており実質的な支配者ともいえる存在であった。ちなみに村長は行商をしていたこともあり村の外の事情もよく知っており顔もきくため村長をしている、いわゆる顔役である。

ラルゴの父親は少しの間、難しい顔で黙っていたが、

「王国に属する身分である以上、ラルゴのことで何かを言われたら王国の指示に逆らう事はできない。…だが、…出来れば冒険者になって認められる功績を立てた後は、王国に顔が利く身分で村に帰って来て欲しい…。」

ラルゴの家にとっては確かに理想的だ。

（現実派の我が親父殿にしては希望的要素が随分強いし、不明確な要素が多すぎる、イマイチだな。）

ラルゴとしてもそうありがたいが、あまり時間がかかるようでは弟に悪い。

「ラルゴの弟もシツカリしてるからさ、どちらが後をついででもいいようにシツカリ決め事をしとくのがいいんじゃない？こいつはラルゴのためを思っ言ってるんじゃない、正直、この村に憂を残して出て行きたく無いんです。人の家の話に口出しして悪いけどさ、…もう戻ってくる事ないと思うから。」

ケインは、我が家の、つまり村の大問題を…分かっていてもラルゴの父親が言えなかったことをアツサリと言いつつ切った。

（相変わらず決断力がすつ飛んでいるよケイン、俺はもし親父殿のようにリーダーを任される立場に着いたなら間違いなくお前を手本にするよ。）

ラルゴもこれから自分がどうするかを、全力で決断したいと思った。（ただ、あの押しの強さを何故、ガールフレンドを作る事に使えないのかね…。）

ラルゴの尊敬する友人（後書き）

ラルゴはケインをかなり買いかぶっています（笑）

テストでデットorアライブ(1)

王都に近いある森の中、3人の人間が地面に空いた入り口の奥、階段の先の暗闇を見つめていた。

1人は灰色の髪 of ケイン、その右横に亜麻色の髪をしたラルゴ、左横のもう一人は金髪の女性である。女性は緑眼で背もスリと高く胸もある。顔も美しく妖精族なのではとうたぐってしまうが耳はとんがっていない。

(まあ、年齢は俺たちより…)

ケインがそこまで考えた瞬間げんこつが落ちて来た。

「…今、私にとって不愉快なことを考えていたな。」

痛む頭をお抑えながらこの人は絶対読心術のアビリティを持っていると心の中で呟いた。

「ケインお前、女性にそんな視線向けたんじゃ…バレバレなんだよな。まずはタチアナさんに謝れよ。」

女性慣れしているラルゴがフォローを入れる。

「でもラル！痛い思いをしたのはコツチの方なんだよ！なんで僕が…ゴメンなさい。」

タチアナの絶対零度の視線を浴びているのに気付き、完全降伏する。「…とにかく、もう一度確認のために言っておく。このダンジョンはモンスターの駆除が終わったばかりだから、まだ集団で襲われる確率は少ない。マップチェンジ()も先月したばかりだし、大体1階層しか無いのだから1日で攻略できる。まさに卒業テストにはふさわしいダンジョンだ。存分にアビリティをチェックしてくるがいい。だが、くれぐれも油断するな。ここのモンスターは弱いパペット(人形)しか出てこないとはいえ、初心者のお前達の方が間違いないく弱いからだから…」

タチアナはラルゴには微笑んで、ケインには氷の視線を向けてこの卒業テストの内容を伝えて来た。

王都に呼ばれてこの一月の間、2人は戦闘技術や歴史などの学問、そしてアビリティについて学んだ。

タチアナは今回2人の師匠役を任された紋様術師である。アビリティ持ちにはその能力を高めるための紋様を体に描く。ケインとラルゴの2人に紋様を描き、その能力の解析と強化を行ったのはタチアナである。

当然アビリティについても調査した。ラルゴは予想通り”チェンジアニマル（動物変身）”であった。ケインは”ブースト（身体能力強化）”らしい。

カインの方を断言できないのは、色々とあつて、体に紋様を上手く描けなかったせいである。

この一ヶ月で2人ともある程度アビリティを使いこなすことが出来るようになっていた。今回はそれを実践で試すわけである。

「ではタチアナさん、行って来ます。」

「死なないようにガンバってくるよ。」

2人はタチアナに挨拶をして階段を降りていった。

「ハーティア、いるわよね。」

「三步後ろにいます。」

タチアナの小さな声に返事があつた。

「隠れてサポートをお願い。生かさず殺さず、死にそうにならない限り手を貸さなくていいわ。それよりケインのアビリティの観察をお願い、今まで見た紋様のどれよりも解析が難しいの。」

紋様はアビリティ持ちに元々ある印のようなモノを筆に付けた特殊なインクでなぞることです浮かび上がる（ ）。

ずっと昔から紋様とその発現される能力を記録して来たことで、今日はかなりの高確率でアビリティを言い当てる事が出来る。だがまったくの新種のアビリティは理解不能な事が多い。そのためにも今回は特別にダンジョンまで用意して”姿隠し”のアビリティを持つハーティアを呼び寄せたのである。

「この迷宮のあれは…2人にはまだ教えてないでしたよね。サポ

「トが間に合わず死ぬかもしれませんよ？」

「構わん、データが取れば元は取れる。」

「…分かりました、それでは追跡を開始します。」

ダンジョンに入りながらハーティアは心の中で2人を無事帰還させることを誓った。彼もまた1人のアビリティ持ちなのであるから。

テストでデットorアライブ(1) (後書き)

マップチェンジ・ダンジョンフィールドは不定期でその構造や壁の位地が変わる

アビリティ持ちの印・力の源。^{らしい}紋様術師にしか見えない(解析できない)。

テストでデットorアライブ(2)

ケインとラルゴは薄暗いダンジョンの中をゆっくりと進んでいた。「灯りが要らないのは助かるよな」。

「まったくだね。」

ラルゴの漏らした言葉にケインは前を見ながら同意の意見を返す。人工ダンジョン(迷宮)は天井面が発光していて、灯りが要らないと説明を受けている。しかし、トラップ(罠)が発動して消えてしまふこともあるらしい。このダンジョンにはいるに当たり、2人が先ず覚えさせられたことは、目隠ししての灯りの起こし方であった。装備に関していえば、2人とも貸与された皮鎧と硬帽子、棍棒(松明にもなる)、これに予備の短剣を腰に付けている。このダンジョンに出現するモンスターのパペット(人形)は石のような材質で出来ているらしく刃物はあまり役に立たないと聞いている。

2人ともモンスターと戦った経験はない。しかし、野生の獣と戦うことはよくあった。村に野生の獣が現れ作物を襲うことが少なく無かったのだ。特に多かったのがスキンヘッド猪()で、畑の作物を我が物顔で食い散らかす上に、近づくと突進して来て相手を吹き飛ばす厄介な相手だった。村の男衆総出で退治することもしばしばあった。村では子供だったし、実質的な村の代表の跡取り息子だったのでラルゴはあまりそういうことの前面に出ることは少なかったがケインはよく前に出た。弓や槍で小物を仕留めたこともある。

ただ、剣の稽古をつけてくれた王国騎士さん曰くラルゴの方が逸材らしい。ケインでは練習試合で全く触れることのできなかつた騎士からラルゴは綺麗な一本を取ったのだ。

(僕は、この先こういう仕事で生きていけるのだろうか?)

ケインは自分の実力不足を感じると落ち込んでしまふタイプで、今も前を向いてはいるうちにいつも間にか俯いている自分に気がついてまた落ち込んでしまふことを繰り返していた。

「ケイン、あれっ！」

ラルゴの警戒の声で集中力を取り戻す。少し前方の床面の一部が発光している。そこから、ゆっくりと人型のモンスターがせり出してくる。

モンスターの頭に握り拳大の石を投げつけた。しかし、ぶつかる直前に弾かれパコツと軽い音がした。

「…やっぱり発光が収まるまでは攻撃は効かないんだな、つよつと！」

ケインは発光が収まるのを見計らって、もう一度石を投げつけた。

「いつの間に用意したんだよ…そんなの。」

「迷宮に来る途中で、2、3個ね。一応確認用だよ、実際効かなかったし。来るよ。」

2個目の石は胸にぶつかったがたいして効いていないようだ…。

さあ、始めてのアビリティバトルだ！ケインは気合のこもった声を発しモンスターに突っ込んでいった。

テストでデットorアライブ(2) (後書き)

スキンヘッド猪は野生の動物で、モンスターではありません

テストでデットorアライブ(3)(前書き)

設定を修正しました。

粘土細工のように潰れた↓陶器のように砕けた

テストでデットorアライブ(3)

モンスターは人型を取ってはいるが全く生命を感じさせない動きをして向かって来た。

パペットと呼ばれるこのモンスターはダンジョンによってかなり違いがあると教えられた。

今向かって来るパペットは大人の大きさほどで2人よりも背が高い。身体つきは細身だが、腕の長さが肩から膝まであり異様に長くみえる。体の表面は茶色で光沢があり天井から発せられている灯りを照り返して正直不気味だ。顔はのっぺりとしていて表情はなく真ん中に赤く光る石のようなモノが埋まっている。

「アビリティ発動！」

突進しながらケインは大きな声を上げた。紋様術によって描かれたラインが紫色に輝き浮かび上がる。ケインは顔や瞳にまで紋様を施されているので、ラルゴのには迫力あるし目立つね」と笑われたが。ちなみにかけ声は発しなくてもよいのだが、初心者の方は発動のイメージを固定するために発声するように指導されている。

パペットは両腕をでんでん太鼓のように振り回してきた。

かなりの加速を伴って自分に向かって来るソレを…ケインは世界がゆっくりになるのを感じながらじっくり観察した。

(…関節は無い…前腕は硬そうで手のひらはなく指？いや爪が手首の辺りから直接生えている…上腕は太いゴムひものような感じかな、伸びるだろうから注意しよう)

旋回する両手を回避して懷に飛び込む。タチアナからゆっくり感じるのは身体能力が上昇し加速しているからだと言われた。

(狙いは足首！)

思いっきり棍棒を振り下ろす。ビキリとヒビが入るのが見えた。両手による旋回攻撃のため足を踏ん張っているのを観察していたのでここを傷めれば旋回攻撃ができないと踏んだからだ。

案の定、パペットはバランスを崩して次の旋回攻撃に移れない。

同じくアビリティを発動させたラルゴが、ここぞとばかりに棍棒を振りかぶって跳躍した。パペットはケインを無視して片腕を前方のラルゴにつき出そうとしてた。

(…相打ちくらいのタイミング、被害はラルの方が大きい、…やらせない！)

一瞬でパペットの側面に回り込み棍棒で腕を突く。止めることはできなかったが、攻撃方向を狂わせることに成功した。ラルゴの渾身一撃が振り落ろされる！

がきん、といい音がしてパペットの頭部が陶器のように砕けた。

崩れ落ち、完全に動かなくなったこと確認して2人は歓声を挙げた。

テストでデットorアライブ(4)

「しかし、その”限定発動”って便利だね。」

パペットを倒し、2人は背中合わせで座りながら水筒の水を飲みながら反省会をしていた。

ケインはラルゴのアビリティ”アニマルチェンジ”による跳躍は自分のアビリティ”ブースト”より勢いがあったように感じた。ただし、動物の姿になっていたわけではない。

「タチアナさんがアビリティは型が決まっているわけではないから、自由な発想で使えていったからさ。まっなんとなくできるかなって練習してたら、…なんかうちやうもんだよな、…アビリティってオモシロいな。」

”アニマルチェンジ”は自分がよく知った動物にしか変身できないらしい。アビリティは総じてイメージが大事なようでラルゴはまだ昔飼っていた犬にしか変身出来ない。タチアナさんの特訓で本物を見ながらなら猫に変身出来るようになってはいたが、それ以外はまだ無理だった。

また、犬の身体能力は人間より優っているところは多いものの、戦闘に関してだけいえば武器や防具を使える人間の姿の方が有利なことも多い。なら変身しないで動物の能力だけを発現出来ないかって考えたらしい、今回は犬の脚力だけを発現したかたちになる。

「ラルのあの動きを見て、タチアナさんが一番驚いていたのは笑えたよな。」

「…はは、でも普通に発動するよりも効果が出るまですこし時間がかかるのがネックだな。正直、同じタイミングだったらケインならたくさん攻撃できるし。」

「うん、…それで…別の話がいんだけど…僕の動き、おかしくない?」

「どこが?」

「って、自分でわかんないから聞いてるんだってば。」

「わけ分からん、…もう少し説明しろよ。」

ケインは少し迷いながら、

「僕のアビリティは”ブースト”っぽいつて言われてるじゃない？ただ、過去の記録を見てもらったけど、なんか違うような感じがして。どっちかっていうと”ヘイスト（加速）”に近い気がするんだ。」

「でも、ヘイストはほとんど筋力は上がらないって話したろ。その話、タチアナさんも調べてくれるって言ってたじゃないか。」

「…そうなんだけど、…ラル、実はタチアナさんに話してないことがあるんだ。」

「…わかった、話してみろよ。」

一旦、周りを見渡してパペットが湧いてきていないのを再確認してからケインはアビリティ獲得のときの自分の頭の中に響いた”誰か達”の会話のことを話した。

「…ってことは、2人の神様にアビリティ貰ったってことか？」

「…多分。」

「まあ、それじゃ気になるよな。…うーん、たしかに言われてみると…ときどきケインの姿が見えなくなる気がする。早くて目で動きが追えないだけなのかもしれないけど。」

「そうか…ありがと。あと、ラルの方も気になるんだ。」

「は？」

「僕はラルが倒れるのを見てから、自分の身体に異変を感じたんだ。あの人達の会話から感じて3人目の人ってラルにアビリティを授けたっぽいんだけど。ラルが倒れた原因がアビリティ獲得なら、ラルも…。」

「じゃ、なにか。俺も2つアビリティ貰ったってことか？」

「正直あの時、頭の中がぐるぐるしてたから、本当にそんな会話が有ったかも自信無いんだ。」

「…まあ、いい方に考えろよ。2つアビリティ貰ったかもしれない

なんてすごくないか？ウルトララッキーだよ。たえそうでなくても損はしてないし。」

ケインはラルゴのこんなところを羨ましいと思っているが、絶対言わないようにしている。そんなことをいえばお互い恥ずかしくなるだけだ。

「…だな、そろそろ探索を再開しようか。」

「OK」

「それと、さっきのパペットへの攻撃、あれやめろよ。」

「なんで？」

「大振りで、隙が大きすぎる。僕が攻撃を逸らさなければ大変なことになるってだよ。」

「…結果オーライで、いいだろ。」

ケインはここでラルゴの声が少し変わっていたことを、怒っていたことを気付けなかった。そのことを後になって随分後悔することになる。

テストでデットorアライブ(5)

「アビリティ発動！発動！もっと早く動け！自分！」

焦りと混乱で息が苦しい。パペットの攻撃をかわしてから一気に距離を取る。パペットと同質と思われる障害物に身を隠して、様子を伺いながら息を整える。

（さっきラルと倒したパペットよりずっと強い！…ラル、死ぬなよ。）

ラルゴがいると思われる壁の向こう側をチラリと見ながら親友の身を心配する、そして打開策を見出す為に先ほど起こったことを思い出す…。

—————

「結果オーライじゃあいくつ命があっても足りないよ。」

ラルゴの行き当たりばつたりの考えを否定する。

「そもそもラルは基本家に帰ることを視野にいれているんだからもつと慎重に動けよ。」

「家は関係ないだろ！！お前何様のつもりだ！！」

もの凄い怒鳴り声が帰ってきてケインは正直びっくりした。

「…そうだ、アレだろ。初モンスターを俺が倒したんで嫉妬してるんだろ。みつともない！」

「はあ？そんなわけないだろ！」

「いや、お前はそんなやつだね、前にミーナちゃんにお前が告白しようとしたとき、呼び出した俺にミーナちゃんが告白してきたからむっちゃ嫉妬してたじゃん。」

「それこそ今、思いつきりカンケーないだろ！ラルは後先考えなさすぎな上にジコチューだよ。」

「だーかーらーっ（？）」

ラルゴがさらに何かを言い返そうとしたそのとき、2人の間にポンという音とともに白い煙があがり、煙の消えた場所に1人の子供が立っていた。

その姿は、美しいの一言に尽きた。性別や年齢を超越した存在に思えた…神だと言われればそのまま信じたと思う。

「とりあえずわかったから。全て僕に任せて！ゲームで解決しよう。」

全くわけの分からないことを言われました…。

テストでデットorアライブ(6)

「ぼくのはGMってよんで。ルールをせつめいするね、いまからこのだんじょんふいで2つにわけてそれぞれ1たいずつパペットをよういするから。さきにたおしたほうがかち！しつもんはないね」

ニツコリと笑いながら神？のような子供は一方的に説明を始めた。そしていきなりケインの方を指差して、

「…と、そのまえにきみはジャマだからたいしゅつ」

ポン？と音がして振り返ると、ケインの後ろ三步ほどの位置に煙が上がったのがみえた。

「今誰かの人影がチラツと見えただぜ。」

見える位置にいたラルゴがケインに説明した。

「じゃ、よういするね」

と言って子供がポン？と煙になって消えた。

静まり返った空間で2人は目を合わせた。鏡で見れば、今の困惑した顔はお互いそっくりだろうと思った。

やがて、フロア全体が大きな音お立て始めた。一番外側の壁以外、壁という壁が床面に吸い込まれてなくなる。あちこちにパペットが見えたが皆、出現したときと逆に床面に沈んでいった。

もの凄い広い空間ができあがったと思ったら、今度は逆に床から50センチ角のキューブ(立方体)がドンドンとせり上がって来た。

空間を2分する壁とランダムな位置に小山(こちらは適度に配置された障害物だと思う)が出来上がって来た。

「うわ？」

いきなりケインは煙に包まれ、気が付くと見たことの無い場所に立っていた。4つある壁面の1つがキューブで、今まさに完成しつつあった。

(反対側に転移させられた？アビリティ！ダメだ間に合わない！)

全力で向かうものの、到着する直前に壁が完成してしまった。

（じゃ、スタート♪）

どこからか声が聞こえた直後、床の一部が発光し始めた。先程倒したパペットが現れたときよりはるかに大きな範囲が…。

（さいごにルールのせつめいをもうひとつ、さきにたおしたパペットのところだけ、ちじょうへのかいだんをよういするからね♪）
「ッ！ラルー！！」

ケインは向こうに聞こえないと、届かないと思って、叫ばなければいけない気持ちだった。

テストでデットorアライブ(7)

今回はラルゴが語るお話です。

ラルゴはパペットがいる場所から随分離れた場所で寝転んでいた。ゲームが始まってからすぐの攻防で棍棒は折れてしまっていた。犬に変身して駆け回って今に至る。

(隠れ鬼ごっこは卒業したつもりだったんだけどな。)

案外平気でいる自分に驚きを感じている…。

(バカケインはこいつを倒せるかな。)

時々、近づいて短剣で攻撃したが(アビリティで変身すると、服とか身につけているものも取り込んで変身することができる。意識しないと出来ないのも、まだときどき失敗して人間に戻るときに裸になってしまうこともあるが)全く効かなかった。

武器のいらない、それでいて攻撃力のある限定発動アビリティも覚えればよかったと思う。たとえばゴリラの力だったらこのキューブ投げれたかもしれない。

(まあ猫で手こずってるんじゃ、他の動物では無理すぎるけど。)
幸いなことに背の低い犬にとって50cm角のキューブは視線を遮るいい障害物だった。キューブは高いところで3段(計1.5m)まで積み上がっている。

(…ケインならこの状況どうするかな?あいつだけでも地上に脱出してほしいけど。)

あの説明からするに1人しか外に出られないらしい。
最もあいつは1人で出ようとしないうけどと思っていたとき、いきなり壁が…4つの壁で出来ている、四角い空間を作る1つの壁、つまりキューブが積み上がって出来たものが大きな音とともに弾け飛んだ。キューブ縦横2つつつ計4個分がこちら側に押し出されるかたちになりその分だるま落としの要領でキューブが下に落ちた。

当然、天井に近い最上部に穴の空いた空間ができる。

ラルゴは笑いながらそこを見上げていた。

（あいつらしいや。）

すぐにそこには彼が、…先程バカ呼ばわりした親友が現れた。

テストでデットorアライブ(7)(後書き)

次で戦闘は終わらせたいです。

テストでデットorアライブ(8)

ケインは素早くあたりを見渡して、パペットと、ラルゴ(犬)の位置を把握した。結構な高さをひらりと降りる。そして一気にダッシュしてラルゴのところまでかけよる。

「壁から離れて！」

注意してから振り返ると、轟音が鳴り響いてキューブの壁が崩れパペットが現れた。

「無事でなによりだけど、出来ればあれを連れて来て欲しく無かったよ。」

「壁を壊してくれたからもう用無し！！ラルかたずけて。」

「俺か！しかも2体！」

「無理？」

「むりむーり。」

「じゃ、2体2で……」

ケインはパペットから距離を取るために、走りながら幾つか策を話した。

「OK！アビリティ発動！」

ラルゴは犬に変身してパペットの1体に向かう。

パペットは2人で倒したもののより頭1つ分大きいし速さもある、力の強さは見ての通り重いキューブを軽く殴り飛ばす。かたちの違いは腕のさが爪のようなものではなくってトゲトゲのある鉄球とこぐらいだ。腕は振り回すより直線上に射出することが多い(チェーン付きで巻き戻される)。

(僕達に戦闘技術はない！けど！)

1体のパペットに向かい攻撃を交わしてすり抜け、ラルゴを追いまわすもう1体に近づく。ケインに誘導されたパペットが追いかけてくる。ラルゴもケインの方に向かってきて、2体のパペットが同時に鉄球を射出する！

（今！）

いまから行おうとすることを強くイメージする。

（アビリティ全開！！）

自分に向かいくる鉄球を棍棒で打ち付けて軌道修正し、ラルゴに向かう鉄球に回り込む。

犬のラルゴに向かって打ち出された鉄球の軌道は下向きのため先程より強く打たなければならない。

（いけー！ホームラン！）

かきーんと金属バットのような乾いた金属音を残して鉄球はパペツトの方に向かう。

見事命中！2体とも胸に大きな穴が空いてズシンと大きな音を立てて倒れた…。

「ういな…ええとにんげんのほう！…たぶん。」

…随分と大雑把な勝利宣言が聞こえた。

テストでデットorアライブ(9)

「よくせいかいをえらべたね」

何時の間にかケインのすぐそばにいたGMはパチパチと拍手を送ってきた。

さつきは神々しい感じがしたが今はイタズラっ子にしかみえない。

「パペットとおなじいろにしたし、キューブのかべもつみあがるのもみせたから、だぶんだいじょうぶだとおもったけど」

「大丈夫なわけ…」

反論する前にGMはポン？と音を立てて消えた。

(しょうひんは、パペットのめのほうせき、いいねで売れるよ。あと、ボーナスあげるね♪きみたちのアビリティは2つだよ。)

床面から階段がせり上がってきた。天井面の一部から外の明かりが見えた。

(たのしかったよ、またあそぼうね♪)

「…一方的になやつだったね。」

「ホント、正直もう会いたくないぜ。」

2人で宝石をパペットの顔から穿り出す作業をしていると、

「ケイン、あのさ、最初のパペットを倒したとき、俺が無茶したのは、…お前がなんとかしてくるって思ったからだ。」

ラルゴがいつになく素直な口調で話しかけてきた。

「…きずかなくてゴメン。…僕もさラルを信じることにするよ。」

このときケインは生き残ったことより、なぜか、”生きていること”がとても嬉しかった。

タチアナ史上最大の屈辱

ケイン達の騒動があった日から数日後、術師会館の比較的簡素な部屋にタチアナはいた。

今回の顛末の報告、というより査問会である…。よくつもまあ長老達がこれだけ集まったものだとかチアナは驚いた。

（いくら私が王国一の美貌の持ち主だといっても、…みんな暇なのね。）

やがて、最長老が声をかけて来た。

「さて、タチアナくん。こっちへ来てくれるかな。」

長老達の席の近く、対面する位置に椅子がある。

タチアナは礼もせず、そこに座る。その態度に長老達から不満の声がかかる。

（いびりたければいくらでもしなさいよ。）

タチアナはここにいる誰にも頭を下げたく無かった。

「ただの報告会だ、堅苦しくする必要はないよ。」

ほとんど会ったことが無いのでよく知らなかったが、最長老はどうやら話のわかる人物のようだ。

「じゃあ、始めよう…今回の件の報告書はもらっている。新種のアビリティの調査のため、高い金を払ってダンジョンを用意した、Aランクの冒険者も雇った。

だが、結果として調査は失敗した、ダンジョンは今侵入不可能だと。

…これで間違いないね。」

「…はい。」

拍子抜けするほどは話しが早い…。これならすぐ終わるかもとタチアナは少し期待した。

失敗というより言葉に反応してか、また長老達から不満の声が上がったりしてザワザワし始めたが、最長老は手を上げてそれを制した。

そして、ここからタチアナにとっては予期しない展開になった。

「タチアナ君に落ち度はないから特に懲罰はなしだよ。…ただ、調査からは外れてもらうね、師匠役も終わりだ。」

「了承しました。」

「じゃあ、その件は終わりにしよう。」

あまりにも甘い裁定と早い査問の終わりに返って戸惑ってしまった。

「じゃあ、タチアナ君はこちらに座り直して。」

長老達の席のはじっこ、つまり末席を指してそこに座るようにタチアナに指示がでた。

(…目的は何？これから何が始まるのかしら？)

「じゃあ、ハーティア君が入って。」

扉から入ってくるハーティアに、今回雇っていた姿隠しのアビリテイを持つ男に視線を送る。

「わざわざ来てもらって済まないね。」

「お気になさらず、上司が最長老によりしくとっております。」

ハーティアが挨拶を返す。

「皆に説明しておこう。彼は私の知り合いの配下で冒険者だ。タチアナ君の要望に彼を押したのは、その私の知り合いが信用が置ける人物だと推薦してくれたからだ。」

周りの反応を確認するように少し間を置いて

「…今回は彼の上司が私に気を利かせてくれてね、面白い話を持って来てくれた。ハーティア君、君の口から報告してもらえるかな。」

「はい、…今回の依頼はアビリテイ持ちのケインとラルゴの2人を監視して、新しいアビリテイの情報を得ることでした。結果的にそこらはなにも得られませんでした。」

しかし、2人は面白いことを話していました。」

タチアナは自分の方をみようともしないハーティアの話っぷりに、自分に不利になる話が始まるのだらうと予想し…的中した。

「2人ともマルチアビリテイ持ちの可能性があります。」

ハーティアが2人の会話を再現するように話しながら報告すると、

部屋の中はどよめきに包まれた。

2つ以上のアビリティを持つ者をマルチアビリティ持ちという。非常に珍しいケースな上に、1度に2人ともなると前例がない。

このとき、最長老の視線にタチアナは気がついた、そして意図するところも。

「非常に興味深いことで、これから追跡調査が必要になる。

だが、残念なことにタチアナ君が今、それを外れたために後任を決めなければならぬ……さてどうしたものか。」

（……私から2人を取り上げて、……これほどのサンプルを奪って、それを誰が研究するのか決める席に私を座らせて！

これが本当の罰なのね、なんていやらしい。）

心の中で、タチアナ史上過去最大級の憎悪が渦巻いたが表情には出さない。そんなことをすれば最長老を喜ばすだけだ。

その後、タチアナは一言も発言することもなく、ただ椅子に座ってこの拷問が終わるのを待った。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（１）

王都からさほど離れていない位置にララカルという街がある。海に近く、山も近く、農作も盛んで、工業地帯もある上、温暖な気候で観光スポットとしても人気がある街である。

（…つまり冒険者としては、仕事が多くて理想的だよな。）

ケインはラルゴと繁華街を歩きながらそんなことを考えていた。

「ねえ、ハーティアさん、あそこは？」

「ああ、この辺では有名なお菓子のお店だね…」

ラルゴが案内してくれるハーティアさんに気になる看板、お店、服装など様々な質問を浴びせていた。ハーティアさんもいちいちそれに付き合って説明してくれる。

（やめてくれよ…田舎者丸出しだよ…。）

王都での訓練を終えて、２人は王国の官僚から、暫く冒険者をすることを進められた。特に強力なアビリティ持ちはそのまま王国に雇われる（いまでいうと公務員になるってこと）こともあるそうだが、ケースとしては少ないらしい。返って気楽でいいとケインは思う。タチアナさんとはケインはなぜか王都を出ることが決まってから会うことができなかった。苦手としていたので積極的に会いたい相手ではないがお礼くらいは言いたかった。一応手紙は置いて来たが。ラルゴも出発前日に１度だけ話せたただけだといっていた。

今回はハーティアさんという先輩冒険者が相談役として自分達に配置された。冒険者として拠点となる街を決め、冒険者として生活する場所となるパーティーハウス（通常ハウスと呼ばれている）を紹介し、冒険者として登録してファーストミッションをこなすまで面倒を見てくれる、そんな役を彼は王国から受けているとのことだ。

「もうすぐ１件目のパーティーハウスに着くからね、さっき言ったとおりまず筆記と面接が絶対あるよ。」

因みに私は外で待っているからね、私と一緒にいると判断力や決

断力がない人物だと判定されるんだ。緊張しないでいいから頑張っておいで。」

（うう、そんなこと言われると余計に緊張するじゃん。）

ケインはそういうプレッシャーにいつも全然動じないラルゴが羨ましいと思う。

やがて、案内された建物の前でハーティアさんと別れ2人は中に入っていた。

ララカルの街にて…冒険者業に就職(2)

カンカンキンキンと音が響く。

早朝、2人はハーティアさんに剣術の指導を受けていた。

二人掛かりで切りかかって行っても全然平気で、逆に切り返される(ハーティアさんはわざわざ歯を潰した練習用の剣を用意してくれていた)。

(Aランクの冒険者って、すごすぎ。)

「剣はこのくらいにしましょう。次はアビリティを使って全開で来なさい。」

ハーティアさんは剣を置いて木でできた短剣を持って構えた。ケインも短剣にする、こちらは本物だ。

「ラルいくよ、アビリティ発動。」

ハーティアさんの正面に高速で移動し左右に動いて攻撃のタイミングを探りながら隙を作ろうとする。

と、後ろからラルゴ(犬)が噛み付こうとするがハーティアさんは振り向きもせずによけて拳骨を下ろす。

「(ゴッソ) はい、脱落。バレバレだよ…。」

(自分が気を引いて、ラルが奇襲。悪くないと思ったけど…。相手が悪すぎ。)

ケインはさらに早く動くことをイメージして側面から攻撃を仕掛ける。

ハーティアさんの左拳がケインの顔に伸びてくる。かわして懐にはいった。

「おごうっ!」

何が起こったかわからなかった。何時の間にか地面に這いつくばっている。ハーティアをみると攻撃したままの姿勢で止まっていた。膝蹴りを顎に受けたようだ。

「あんな誘導に、引っかかっちゃダメだよ。」

手をヒラヒラさせながらレクチャーする。

「これがSCM（）。大いなる過去との連環記憶、王国がアビリティ持ちを冒険者になることを勧める理由だ。」

2人には罰としてスクワットを指示しながら話を続ける。

「過去の遺跡、ダンジョン、過去の魔法文明が作ったモンスター達。それらに長年、接することにより科学でも魔道でも説明のつかない身体能力の成長や知識が身につく。

たとえアビリティ持ちとて、これを得た者に相対すれば勝つことは容易ではない。」

ラルゴと目を合わせてみると、同じことを考えているとアイコンタクトで返して来た。冒険者として十分な実力をつけるのは、はるか彼方、先の先、長いな」と実感した。

「ちなみに昨日のパーティーハウスからは採用を見送るって連絡が来たからね。」

とどめを刺されました。

ラカルの街にて：冒険者業に就職（2）（後書き）

SCM：スーパー・チェーン・メモリー

ゲームでいうところの経験値を表現する苦しい言い訳。本来SCMはサプライチェーンマネジメント（材料の生産から需要・購入に至るまでを一つのチェーンにみたてた経営・管理の一手法）の略語

ララカルの街にて…冒険者業に就職(3)

朝の修行の後、支度をしてパーティーハウスに向かう。今日のパーティーハウスは本命になるだろうと説明してくれた。なんでも対応が丁寧で良心的なパーティーハウスとし有名ならしい。

「それにしても、ケイン君のアビリティは不安定ですね。タチアナさんはそんなに腕の悪い紋様術師ではないと聞いているのですがねえ。」

ケインが聞いたところによるとタチアナは若手有望株の1人らしい。他のアビリティ持ちがタチアナのところにメンテナスをしに来たときに聞いたのだ。紋様は描いておしまいというものではなく、月に1度の頻度でメンテナスが必要なのである。描いた者が担当する必要は必ずしもないが、メンテナスは描いた者、またはその門下生が担当するのが普通だ。

ハーティアさんの呟きに、爆笑という反応をしたものがいた。ラルゴだ。

「それには理由があるんですよ、タチアナさんがこいつに紋様を描いている最中に緊急のメンテナスが入ったんです。相手が貴族ですぐに来いって言われて。」

しょうがなくタチアナさんはそこからハイスピードで描いたもんでアビリティは不安定、アビリティの解析も上手くいかなかったつて。

だから、タチアナさんはケインをみると自分の駄作をいつも見せられてる気分になるから嫌なんだって。」

あの冷たい視線は僕ではなく紋様に向かってたわけだ…僕が嫌われていたわけではない？ようだ。

「紋様のリライト(上書き)は1ヶ月は間を置かないといけないはずだから…、そろそろリライトが出来るんだろ？ならパーティーハウスが決まってからですね。」

パーティーハウスごとに懇意にしている紋様術師は違っからね。」
ハーティアは哀しい者を見るような、生暖かい視線を送ってきた、
やめて欲しい。

「そろそろ着くよ、その角を曲がってすぐだ。
行つてらっしゃい、骨は拾つてあげるから。」

最後に変なことを言ってきたがハーティアさんのセンスはこのとこ
ろ同行してもらつて理解している。

「頑張ります。」

「骨を拾われてやるぜ、待つててくれ！」

調子を合わせたラルゴの返事に力が抜けていくのを感じた…それは
それで良いことなのだろうと思うことにした。

ラカルの街にて…冒険者業に就職(4)(前書き)

この作品を読んでいたいただき本当にありがとうございます。
感謝感激雨あられの心境です。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（４）

ハーティアが語るお話です。

パーティーハウスに入ったケイン達がまっすぐ受付（と言ってもバーのカウンターのようなところ）に向かっていくのが見えた。

ハーティアは２人の後ろから入ったのですぐ近く、ケインの三步後ろにいた。当然、姿隠しのアビリティを使って忍び込んだのである。

「冒険者のパーティーハウス」遅咲きのスズラン亭”へようこそ。

御用はなあに？」

栗色の髪の毛をしたちよつとふくよかだが、愛嬌があつて、どこか包容力があつて、笑つたとしたらコロコロ笑つてくれて釣られて笑みをこぼしてしまいそうな、そんなことを感じさせる、将来いい奥さんになること間違いな知つて感じの若い女性が話しかけてきた。

「わつ、私達はアビリティ持ちのラルゴとケインと言います。本日は、お、御社じゃなかった、きつ、貴社の冒険者のパーティーに参加させていただきたく思ひまして、まかりこしました！」

（…ラルゴ君、もう君ホネ状態だよ。…サララも引いてるし。）

絶望に打ちひしがれながらも、ハーティアは希望を込めてケインに視線を送った。

「ラルもういい、かわろう。」

我らがケイン君が前に出て話を引き継ぐ。

「すいません緊張してゐるんです。改めてお願いします。僕達２人に冒険者になる機会をください。」

ケイン君はそう言つて頭を下げた。

「王都からの新人さんね。でも良くここが見つけれられたわね。うちは小さいし、”こんにちは冒険者のお仕事さん”にも応募も出していないからだれかに教えてもらったのかしら。」

ヤバイと思つて、脱出の用意を始める。

「ハーティアさんからここが本命だと言って連れてこられたんだけど…。」

その途端、サララの体から黒いオーラのようなものが見えた気がした。「ティーが…全世界の半分を敵に回すアノオトコがここにきているのね。」

もの凄いことを言われたと、動きを止めてしまったことを後悔したが後の祭り。サララはカウンターから出来て自分の足元をさした。

「3秒あげる…3、2、1」

「ゴメンなさいゴメンなさいゴメ…ゲコッ？」

サララの指差した足元の位置に時間内に姿を表して土下座をして誠意を見せたが…踏まれた。

「ヤッパリ、ハーティアさんついて来てたんだ。」

ケイン君が半眼で…見下ろしている！

（ここは先輩冒険者として威厳をしめ…）

「あと100回！」

サララの命令に従い、踏まれたままの姿勢で謝り続けた（爆涙）。

「ケイン、なんか聞いていたのか？」

ラルゴ君が信じられないもの見るような顔をしながらケイン君に聞く。

「イヤ、今朝からハーティアさんやたらハイだったし。昨日のパーティーハウスのこと報告したときもダメダメだった事を聞いて安心していたし、多分…」

「ここに足を踏み入れるのが怖くって、この子達をダシにしたんですよ。」

ちよつと、力を入れるのを強めないで弱めて欲しいですね。

「ちなみに、なぜ全人類の半分を敵に回したんですか。」

「アビリティを使って、こともあるうに私の妹の着替えを覗いたのよ！」

「誤解だつて！あれは不可抗力だべしっ！…」

強く踏まれすぎて喋れなくなってしまった…。言論の自由よ、いず

こへ！

「…えっと、ラルと近くでお茶して来ますから、ごゆるりと。」

につこり微笑みながらケイン君は出て行った…。当然ラルゴ君も。

「あと997回！」

「さりげなく1桁増えてません？」

結局、ケイン君達のことを話し合うのは翌日に持ち越しとなりました。

私？もちろんホネを通り越して灰になりました。

ララカルの街にて：冒険者業に就職（4）（後書き）

王都の名前はまだ思いつかないのに、ララカル（街の名前）はすぐに思いつきました。不思議ですね。

ラルカルの街にて…冒険者業に就職(5)

カリカリカリカリ…、鉛筆で書く音が静かな部屋の中に響き渡る。
今は”遅咲きのスズラン亭”で筆記試験を受けている。

筆記試験の内容は簡単だ。だが、冒険者になるには必須の技術を問うものである。

なぜなら、この国の農村では識字率が低いので字が書けないものも多い。数値を扱う算術はなおさらなのだ。

ケインは元々村を出る事も検討していたので、父親のあとを次ぐ予定であったラルゴの勉強に付き合うかたちで色々覚えていたのが役に立った。

「昨日は本当にゴメンね、ティー君がみつともないところを見せて

」

(ティーがティー君になってるから仲直りしたみたいだな。)

テスト中に話しかけてくるサラさんの態度にどんなものかと思っ
たが、緊張を解いてくれようとしていることが雰囲気的にわかった
ので気にしないことにした。

「本当にハーティアさんのあの態度はびっくりしたよ。でもなんか
昨日よりずっと楽しそうですね。」

ラルゴが言葉を返す。

「そうなの！昨日は皆で払って、お父さんはいつも通り放浪の旅
出てるしリリカは基本寄宿舎で寝泊まりしてるし、一人つきりだっ
たから結構ブルーだったのよ…、そんなときティー君が久しぶり
に帰って来たじゃない？もう、ティー君でば…(エンドレス)」

結局試験時間のほとんどをお喋りに使っていたので、付き合わされ
たラルゴが大変だとケインは思っていたがそうではなかったらしい。
筆記試験後もラルゴはサラさんと話を続けている。

(あいつ、本当に女性と話すのうまいよな…)

ちよっと羨ましいが、あんな長さの会話は自分には出来そうも無い。

その後、面接があるはずだったけど、ハーティアさんの推薦だからと省略された…ティー君は信頼されているらしい。

それから裏の練習場に出て実技試験を受けた。

「皆出払ってるから私が相手をするね、本当にゴメンね。私、アビリティのメンテも最近してないし、相手にならないかも…」

そんなことを言いながら、モジモジしているサララはとても可愛い女性だとケインは思った。

しかし、

「ラル、あれなんに見える？」

ラルゴが苦笑いをしながら

「モーニングターだろ…、あのダンジョンで戦ったパペットの右手を思い出すな。」

そう、モーニングターについている鉄球は普通なら握りこぶしくらいの大きさなのだが、サララのそれはボーリングの玉並みの大きさだった…。

ラルカルの街にて…冒険者業に就職（6）

地面に寝そべって、ケインはラルゴと空を見上げていた。

「ラル、空は広いな…」

「ああ…ケイン俺はな、海にでてみたいんだ。そしてどこまでもどこまでも遠くへ…」

「…現実逃避しているとあっちの世界にご招待ですわ…」

2人とも全力で転がってモーニングターの攻撃を回避した。サララさんはモーニングターを自在に操る。起き上がったところで反撃を試みるも2人同時に吹き飛ばすされる。さつきから同じことの繰り返しだ。

またもやケインは無様に地面に打ち付けられたが、今度のラルゴは違った。

猫に変身してひらりと着地したのである。

（アビリティを使いこなして来たな。）

そうケインが思ったとき、信じられない速さでサララさんがラルゴ（猫）の元へと向かい拘束した。

「きゃ〜可愛い!!」

ラルゴはサララさんにキュウと抱き締められ…白目を向いていた。

「一人脱落…かな？」

”キン!”

上空で何かの音がしたので、自分の存在を完全に忘れたように猫をハグするサララから視線を外し上を見上げた。

（空を飛びながら、誰かが戦っている!）

2人の人物が見えた!そのうちの一人が吹き飛ばされてこちらの近くに落ちてくる。

そのままでは地面に激突してしまう、と感じたケインはアビリティを発動して落下点へと走った。

（気を失っている…ヤバイ!間に合うか!）

さらにスピードをあげてことをイメージする。

だが、

（ツ！間に合わない！）

ケインが諦め掛けたその時、視界にもう一人の人物が入ってきた。ケインを追い越しながら目線を合わせて来た。そして、落下する人物をすくい上げる。

またケインと視線を合わせる、その意味をケインは理解した。

（勢いを殺し来れていない！僕がしたに？）

勢いを殺さず落下点に到着、そして、女の子をお姫様抱っこしている女性をお姫様抱っこして、…アビリティで強化した筋力で受け止める。

「ありがとう、少年！。私はアルパカ40ナイツのアメジストメンバーです！これからよろしくね！」

なにか、お礼？自己紹介？の仕方に疑問を感じてケインは返答に困ってしまった。

祝！内定…いきなりクエスト（1）（前書き）

いつも読んでくれてありがとうございます。
感謝感激アメジストです。

祝！内定…いきなりクエスト（1）

ラルゴ視点のお話です。

ラルゴは軽いめまいを覚えながら、意識を取り戻した。

（…実技試験、終わったのか？）

今いるのは、パーティーハウスの共有フロアでソファに猫の姿で寝転んでいる。

近くでサララさんが見知らぬ女性と話しているのが聞こえた。

「…本当にサララは変わっていないわね、ハーティアさんが気の毒だわ。」

昨日の話でもしているのだろう、意識がはっきりして来たから人間の姿に戻って起き上がる。

「ラルゴ君、起きたのね良かった、ゴメンねちょっと強く抱きしめすぎたみたいで、本当にゴメンね。」

「気にしてないですよ、それよりこの方は？」

話をしていた女性は美人であつた。しかも格好が何か普通で無い、歌手のようなきらびやかさが有つた。

「彼女はアルパカ40（フォーティー）ナイツ・アメジストメンバーのシャイナよ、以前私もアルパカのパーティーに入ってた事あるから知り合いなのよ。」

ラルゴ達は、ララカルに来てまだ3日しかたっていないがアルパカ40ナイツの噂は聞いていた。女性だけの冒険者パーティーハウスでアイドル活動もしていると…。

「アルパカ40ナイツの話は聞いてます、この街最大級のパーティーなんですよ。でも、アメジストメンバーって？」

「アルパカ40ナイツのランクより、最高位のルビー、その下にアメジストメンバー、クリスタルメンバー、原石チームって続くの…、ラルゴ君、貴方に出会えたことに感謝！・感謝！これからよろしく

ね！」

（要するにファンになれってことだよな、この人、押しが強いからケインだったならもう勢いでファンクラブに入れさせられてそうだな…）

そこで、ケインのことと試験のことを思い出した。

「その話はまた今度ね、ケインは？あと試験は？」

サララさんに詰め寄る。

「合格よ、あなた達はうちのパーティーに入ってもらっわ。」

…ぐぐつと押し寄せる歓喜を抑えて、

「ありがとうございます。これから宜しくお願いします。ケインは何処ですか？」

「ここだよ…」

疲れた顔をしたケインが荷物を抱えて扉から入って来た。どうやら宿を引き払って来たらしい、ラルゴの荷物もある。

ケインはシャイナさんのところに向かって近づいて行った。

「リリカさんを送って来ました。帰りに目を覚ましたので少しびつくりされましたけど。それでコレなんですか？」

ケインは1枚のカードをシャイナさんに見せて来た。

「…案外しっかりしてるわねあの子、個人ファンクラブのメンバーカードよ。まだパーティーに入っていないから正式なものではないけどね。まあ、貴方もあの子も試験でコテンパンにされてた仲だし、大事にしてあげて。」

「あの子、合格ですか？一応気になるので…。」

少し赤くなっているあたり、ケインはその子に気を持ったのかもしれない…、それともシャイナさんにな、奥手だから積極的な女性に弱いんだよな、あれ？

「リリカさんで、もしかしてさっき話していたサララさんの妹さん？」

「そうなのよ、私も気になってたの。リリーはどうなの？」
サララさんがシャイナさんに問いかけた。

「私だけで決められることじゃないけど、飛翔のアビリティをあれだけ使いこなしてたし、今までの経験からなんだけどOKになる可能性は高いわ。」

でもうち敷居が高いから、現実とは言えないからね。」

少し困っている、正直で、嘘は言えないタイプのようだ。

「あつ、それからこれをアルパカ40ナイツのルビーって人から預かって来たんだけど。」

ケインが手紙をサララさんに渡す。

封を開けて読むうちにサララさんの顔が真剣なものに変わる。

「ケイン君、ラルゴ君、ファーストミッションよ、しばらくアルパカ40ナイツのところに行ってもらうわ。」

目をケインに向けると、ケインは物凄い表情になっていた。ラルゴが尊敬する、気合の入ったケインがそこにいた。

（俺も負けてられない！）

ラルゴも拳を握りしめて全力を出す事を心のなかで誓った。

祝！内定…いきなりクエスト（2）

暗い夜、ついに待っていたモンスターが姿を現した。デビルハンドという、人間でいうと肘から先の部分だけが地面かは生えたような怪物で大きさは3mを超える。

ケインは急いで松明に火をつけてデビルハンドの周りの地面に次々と刺して行く。夜なので明かりが必要なのだ。ラルゴはヨモモそうで作られるお香を入れた大きなカゴを持って走り回っている。そのお香の煙でモンスターを包み込みように風向きに注意して、そして声をあげた。

「準備OKです！」

4人の女性が姿を現した。

「……アルパカ40ナイツ・アメジスト！愛ゆえに只今参上！」

……

全員、煌びやかな衣装に身を包み灯りを反射するような装飾品をつけている。そう、この4人の戦闘を夜でもよく見えるようにする為の裏方を務めるのが今回の2つの依頼内容のうちの1つだ。

アメジストメンバーは全員Aランクの冒険者で、リーダーをシャイナさんが務める。

シャイナさんが”飛翔”のアビリティで夜空に浮かび上がり戦闘は開始された、上空から戦況を見極め、全員に指示を送るのだそうだ。デビルハンドは形を微妙に変えなが襲いかかる。あんな手に掴まれたらケインならその瞬間アウトだろう。5本の指も針の様に鋭く形を変えながら連続で4人を狙う。

そんな光景を、女性が少し離れたところから見ている。この女性は自分の見たモノを、聞いた音を、遠い場所に送る事ができる。今の光景はララカルにある巨大スクリーンに映し出されているはずだ。モンスター退治をエンターテイメントにするイノベーションは凄いなと思う。ただ、最初ケインはあまり気が乗らなかった。

しかし、アルパカ40ナイツの設立時の話を聞いて気が変わった。
男尊女卑の激しいこの時代、女性の地位向上の為に数人の女性がパーティーを立ち上げた。無力な女性の希望になる様に、差別に打ち勝つ力を得る為に人生と命を捧げた。アイドル活動による人気取りも、この命がけのショーも全ては女性たちの”未来”のため。

4人は派手なアクションを交えながらデビルハンドを追い詰めた。

「……4人の心を一つに！未来に輝きを！フォーティナイツ・アメジストスペシャル・ラブアクション！！」「……」

4人お攻撃が決まりモンスターは霧散する…（？）

体にきしむ様な痛みが走った…、思わず跪く。

4人の冒険者は整列して女性に手を振っていたが、女性が手を上げて終わりを教えるとその場にへたり込んだ。

ただ、シャイナさんがこちらに声をかける。

「少年達！その場で横になってじっとしていなさい。高レベルモンスターを倒した事で大量のSCMを浴びたからあなた達ではきついはずよ。」

ラルゴも座り込んでいる。ケインはゆっくり仰向けに転がり空を見上げた。

（本当の強さって行きたいなんなんだろう。僕は強くなったら何にその力を使うのだろう。）

…体の痛みではなく、心の痛みを感じた。今夜は眠れないかもしれないとケインは思った…。

祝！ 内定…いきなりクエスト（3）

コンサート？の翌日、ケイン達はある湖を目指して川辺を川上に向かって歩いていった。

デビルハンドの出現した場所と近かったので2つ一緒に依頼された仕事である。

「ホントは原石チームが担当する仕事でね、よその男の子に依頼しない仕事なんだけどね、大規模なモンスターの討伐があるかもしれないってことで皆待機なのよね、私は正式メンバーに選ばれてのファーストミッションだから来たのよね。」

喋っているのは、リリカちゃん、サララさんの妹で白銀の髪をしている14歳で、飛翔”のアビリティ持ちだ。今度アルパカ40ナイツの正式メンバー（原石チーム）に選ばれたばかりの女の子だ。ケインは彼女に会った事があった。彼女が採用試験中に墜落して意識を失った時、彼女のパーティーハウスまで背負って送って行ったからだ。

今回は彼女を含め3人でこなす仕事である。

内容は湖にいるキラキラ貝の採取で難易度は低い。ただし、湖にはキラキラ蟹というキラキラ貝を身につける習性のあるオシャレな蟹型モンスターが襲ってくる事があるので注意が必要だ。

この貝は、見た目が綺麗だが、宝飾品としては長持ちしないので市場ではあまり人気がなくお店には出回っていないらしい。しかし、戦闘をこなすため、激しく動くため、長持ちしないアルパカ40ナイツの衣装につけるにはうってつけであるとの事。

「それにしてもハーティアさんが来てくれなかったのは残念だなあ。」

ラルゴが本当に残念そうに言う。ハーティアさんは自分達がファーストミッションをこなすまで一緒に行動してくれると言っていたが、急遽仕事が入ったとのことでアルパカ40ナイツと行動をとるにす

る前に別れていた。

「ハーティア兄さんがいてくれるととっても安心だったわよね。」
そう言えば、ハーティアさんはサララさんとずいぶん前から付き合
いつているらしく、年の離れたリリカちゃんは兄の様に仕上が
ると言う。

「まあ、いろいろと教えてもらって成長したし、今回のミッション
は自分達の力でなんとかしよう。」

ケインの言葉にラルゴはニヤリとした笑みを返した。ケインが自分
のアビリティを実践で使ってみたが知っているのを知っていたからだ。
それ以上に今の自分が”自分の力”、”自分の強さ”にこだわって
いるのを言葉にせずとも彼はわかってくれている。

「もうすぐ着くはずよね、急ぎましよう!」

リリカちゃんは飛んで行こうとしたので慌てて後を追う。

祝！内定…いきなりクエスト（４）

地元の人達から、キラキラ湖と呼ばれるその湖にケインは到着した。波打ち際の砂浜がキラキラ輝いているのは、キラキラ貝のかけらが含まれているからだろうか。湖は半径200m程だろう、それほど大きいわけでもないから深いところは少ないかもしれない。

湖の上を一周リリカが偵察をして帰ってきた。

「中でキラキラしたのが動いているの！ヤッパリね、先輩が言ったとおりだね、かなりの数のキラキラし蟹がいるわね。」

出来れば会いたくないが、好物？の貝を掘っているのを見られたら襲ってくるのは確実だろう。

「私ね、上から見張ってるね。貝はよろしくね！」

そう言くと、リリカちゃんは浮かび上がりケイン達の頭上を旋回しはじめた。

「やるか！」

そう言ってラルゴがミニ熊手を持って砂浜を引っ掻く。どうやらこの辺りの砂浜が一番大きくて掘りやすそうだ。ケインもラルゴに続いて砂浜をひっかく様に掘り始めた。

…しばらく掘ってソコソコの量の貝を集められた。ただ腰が痛くなってきたので伸びをした。上空ではリリカがダンスの練習をしていた。

空中で舞い踊るその姿はキラキラと輝きとても綺麗で、リリカちゃんの魅力を存分に発揮させていた。

（あの衣装もキラキラ貝だよな、素敵だけど…何か引つかかる…なんだろ？）

ダンスをしていたリリカちゃんがいきなり大声をあげた！

「きゃあ！蟹さんが集まって来てる！」

波打ち際の水面が盛り上がり、大量の蟹がキラキラしながらこちらに向かって来た。

（キラキラが好きなんだから、あの衣装をみればくるよ…なんでもっと早くに思いつかなかったんだ！）

「きつとあいつらアルパカ40ナイツのファンだぜ！」

ラルゴの冗談を聞いて笑えないけどありそうとケインが思ったとき、

「じゃあ、攻撃できない？」

とリリカちゃんがファン思いな言葉を発した。

「…ファンじゃないから、ゼツタイ。」

自分でも間が抜けているとしか思えない言葉を、ケインは疲れたようにつぶやいた。

祝！内定…いきなりクエスト（5）

ケインとラルゴは、大量の蟹型モンスター・キラキラ蟹から逃げるため砂浜から離れ、近くの林の中に身を潜めた。キラキラ蟹はケイン達を追ってくると思ったが、砂浜で塊り頭上のリリカちゃんに向けてハサミを振っている。

「本当に、リリカちゃんを見に来たファンみたいだな。」

ラルゴのつぶやきに、ラルゴはハツとなった。

（そうだ、リリカちゃんを見て集まって来たんだから！）

「リリカちゃん！歌って踊りながら向こう岸まで飛んで行って！」

ケインの言葉の意味を了解したことを伝えるためか、リリカちゃんは両手で丸を作った。「みんな？今日はありがとう？私の初ステージ！リリカ、みんなのためにラブパワー全力で頑張ります！」

よく通る声でファン？に挨拶をし、先程ケインが見た舞をセリフ付きで踊り出す。

「…ジエンダー、ジエンダー、あなたの心に届いてー。私は女の子なのー！それは私の誇りなのー…」

ゆつくりと湖に向かって行く。キラキラ蟹達はそれを追いかける様に湖に戻って行った。

ただし、1匹だけ砂浜に残った蟹がいた。一番大きく立派で硬そうな甲羅をしている。右手は大きなハサミ、左手は小さなハサミをしている。

なんと、その小さいほうのハサミで2人で集めたキラキラ貝を器用に甲羅に付けているではないか。

「ケイン、あれじゃ今日の収穫はなくなっちまう。奪い返そうぜ！」
ラルゴは戦闘準備を始めた。アルパカ40ナイツのアメジストメンバーは今日帰ったが道具係の馬車が待ってくれている。それでも明日には出発する予定なので今日貝を集めて持って帰らなければミッションは失敗したことになる。

「絶対に持つて帰ろう。2人とも無事で。」
後半の言葉は自分に言い聞かせるようにつぶやき、ケインも用意を始めた。

祝！内定…いきなりクエスト（5）（後書き）

誤解を招かないようにするためにこの文章を書きます。

私はジェンダーのことは専門家ではありません。

パーティーハウスのアルパカ40ナイツが設立された理由を女性の地位向上としているため、啓発活動として歌詞に織り込んでいるという設定です。

祝！内定…いきなりクエスト（6）（前書き）

いつも読んでいただいて本当にありがとうございます。

勢いでガンガン書く分、誤字脱字、変な言い回し、設定のミスなど、多々あると思いますが、ご容赦ください。

祝！内定…いきなりクエスト（6）

キラキラ蟹は強かった！ケインとラルゴの2人がかりでも余裕を見せている。

（砂地がこんなに戦いづらいなんて！）

しかも時々吹き出してくる泡はぶつかって弾けるときに強い衝撃を発生させる。ラルゴは犬の姿で移動して攻撃だけ人間に戻るというパターンを繰り返している。二本足の自分が一番動きが鈍い。なんとか林のほうにおびき寄せようとするが、キラキラ蟹は浜辺に集めたキラキラ貝から離れない。

「ケイン！俺が注意を引くから一発大きなのをかましてやれ！」

了承の合図をラルゴに返してケインは意識を集中した、

（アビリティ発動、僕はとっても力持ち！）

先日、アビリティのリライトを行いわかったことは”ブースト（身体強化）”の筋力強化に対する発動効率が10%ほどだったということだ…つまり、スピードは上がっていたが筋力はほとんど上がっていなかったのだ。筋力がアップしたのと今の2人の武器・鉄の棒（金銭的にまだ剣は買えなかったが、木の棍棒より攻撃力が高い）で破壊力は飛躍的にアップしている。

鉄棒を振りかぶったままジリジリと砂をしつかり踏みしめながら回り込む。ラルゴが犬の姿で正面から気を引いてくれている。キラキラ蟹がラルゴを挟もうと大きなハサミを繰り出したタイミングで一気に跳躍し振り下ろす！

っと動きを見られていたのか小さいほうのハサミをいきなり突き出されたが、腰の小袋を切られるものの直撃を回避して渾身の一撃を甲羅に叩きつけた。

（…シビれる…）

あまりに硬かったため衝撃で鉄棒を落としてしまった。甲羅は全く傷ついていない。

「逃げる！」

ラルゴの必死の叫び声が聞こえたがキラキラ蟹は目の前、…動けない。

だが、キラキラ蟹はケインには目もくれず砂浜に落ちたカードを小さいハサミで拾う。

やがて、どこか嬉しそうに体を震わせて湖の中に戻って行った。

「…なにを取られたんだ？」

ラルゴが不思議そうに聞いてきた。

「…リリカちゃんの個人ファンクラブの会員カードを…。」

確かにあのカードはやたらキラキラとデコって有ったので…まさかとは思うが…。

（本当にファン？）

確かめる術もなく、する気にもなれず、…この疑問は一生解けないなと思った。

祝！内定…いきなりクエスト（6）（後書き）

実はあのキラキラ蟹はかなり高レベルなモンスターでまとも戦った
ら勝てません。

ハーティア上司（前書き）

「いつも読んでいただいて、感謝！感謝！

今回のオープニングはアルパ40カナイツ・アメジストメンバーの
シャイナが担当します。

今回の話はずらん亭の看板娘サララの元彼で今彼に戻ったハーテ
ィアのお話です！」

ハーティア上司

ハーティアが語るお話です。

コンコンと扉をノックして、若手の職員は入室することを知らせ紅茶を載せたトレイをハーティアの上司の執務室に運び込む。

ハーティアの上司が紅茶好きなのは、皆に知られている。最もそれは自分が入室しやすくするためだ。

栗色の髪の上司は、目立たないタイプの中年男だ。ハーティアは上司の肩を軽く叩き、忍び込んだことを知らせる。

上司は、若手職員が退室した後、秘書官を用事言い付けて退室させる。

「ご苦労だったな、追加の仕事までさせてしまつて。」

「お気になさらず…、3件報告があります。」

秘書官が帰ってくるまでなので、ハーティアは早速話し始めた。

「例のマルチャビリティの2人は予定どおり、誘導できました。今はずらん亭にいます。ただし、問題がありました。」

「紋様がらみか？」

「はい、ずらん亭の冒険者の面倒をみている紋様術師は決して能力の低いほうでは無いのですが、ケインの方の紋様を描くことができませんでした。結局、もう一つの仕事のため同行してもらったタチアナ女史に描いてもらいました、内密にですが…。相手の紋様術師も長老には報告しないと断言していました。」

「当然だろうな、自分が無能だと報告するようなものだ。」

この王国の紋様術師は長老という各紋様術一門のトップが集まって成り立っている。今回の研究サンプル（ケイン達のこと）を獲得したのはフーバー老師で、話にでてきた紋様術師はその門下生に当たる。

「トランス状態にして行つたのでケインは気づいていませんがね、

後、ケイン達のファーストミッションは直接見れませんでしたので
すずらん亭いる既知に報告書を頼んでおきました、こちらです。」「
報告書をみたとき、上司の目元が少し下がったのをハーティアは見
なかったことにしてあげた。

「…苦勞を…コホン、君には苦勞をかけるな、いつも、いやまった
く。」

会話を变えるため、ハーティアは次の話をした。

「…ええ、そう言えば少し気になることがあります。アルパカ40
ナイツの介入を受けたのですが。」

「それについては、君に連絡できていなくて済まない。紋様術師達
の方でフーバー老師が2人とも独占するのはズルいという話が出て
いてな、結局リシエル老師が1人受け持つことになった。」

「…それは、…ルビーの指図でしょうか？」

「おそらくな、リシエルはルビーの紋様術の師匠ではあるが、ルビ
ーの崇拜者だ。先日の査問会のことも当然話していたはずだ。」

当然これからはもっと介入があるであろう、すずらん亭はハーティ
アにとってかけがえの無い人がいる場所で最も信頼のおける場所な
ので2人を連れて行ったのだが。ルビーが相手では一筋縄では行か
ない。これは少し本気で調べる必要があると、彼の直感が告げてい
た。

「…次ですが、例のモンスター封印は無事に終了しました。タチ
アナ女史が予想以上の実力の持ち主で助かりました、若手最高の実
力者と最長老が薦めるだけあります。」

「丁度、貸しができたところだったからな。いい取引だったな。」

「…はい。最後の報告ですが…」

秘書官の気配が近づいてきたことを感じて、小声で早口に説明した。
秘書官が入って来たところで、するりと外に出る。

「アチャチャ！」

後ろから、悲鳴が聞こえた。

（猫舌なんだよな…あの人）

結構時間が立っているはずだからかなりぬるいんじゃない？と心の中で突っ込みながらその場を去った。

ハーティア上司（後書き）

ハーティア上司はいつたい誰か伝わりましたでしょうか？

ケインとラルゴのわかれ道（前書き）

いつも、感謝・感謝です。

ケインとラルゴのわかれ道

地面に寝そべって、ケインはラルゴと空を見上げていた。

「ラル、空は広いな…」

「ああ…ケイン俺はな、夕日をみていると走りたくなるんだ。どこまでもどこまでも夕日に向かって…」

「…イケナイ子達に、オホシ様をプレゼント♪いつもより多く降らせています♪」

先日の試験と似た、デジャヴ感のようなものを感じながら吹き飛ばされた。

（1つでもかわせなかったモーニングスターが4つも飛んで来たらかわせる訳ないじゃん！）

サララさんは先日のモーニングスターより一回り小さいが、2つの鉄球を付けたモーニングスターを両手に持って自在に攻撃して来た。一度にクレーターが4つ出来る。

今日はパーティーハウスの裏の練習場で朝からずっとサララさんの特訓受けていた。

「冒険者が相手の实力を見誤ったら、お終いよ！そう、あなた達もう死んでいるのよ！」

サララさんはファーストミッションでキラキラ蟹と戦ったことをひどく怒っていた。

「格上と戦わなければならないときは、必ずあるわ。でも、もっと考えて！あなた達が死んだら悲しむ人がいることを！」

「…荒れているな。サララ。」

不意に横手から声がかかった。

「ルーク！お帰りなさい。早かったのね！今支度を…」

「せっかくだから、俺も混ぜてくれよ。」

金髪イケメンのルークと呼ばれた男は、軽く叩き首をこきこきと鳴らしながら練習場に降りて来た。

「始めまして、後輩君達。俺はルーク。自己紹介はサララとのウォーミングアップをしながらするよ。」

そう言うと、ゴリラに変身した。

「”アニマルチェンジ”！」

ラルゴが驚いたような声を上げる。

少し離れたところに2人で移動してサララの繰り出すモーニングスターを軽く弾き返しながら、

「鳥に変身して、他のみんなより先に帰って来たんだ。ラルゴ君、キミは僕と同じアビリティだね？」

「喋っている！」

ケインは思わず声にだしてしまった。

「修行を積みば動物のままでもしゃべれるのさ、…参考にしてくれ。じゃあ行くよ！」

そう言うと、今度は黒ヒョウに変身して一気にサララさんに襲いかかる！サララさんは雨のようにモーニングスターを繰り出して距離を稼ぐ。すると今度はカラスに変身して上空に舞い上がり旋回する。

「黒ばっか…、意図的？」

ケインがつぶやいた瞬間、今度は鮮やかな体色のカワセミに変身してサララの胸にクチバシを突き刺したように見えたが、そこにはサララをお姫様抱っこしたルークがいた。

「ゴメンなさいね、せっかく最後はわかりやすい攻撃にしてくれたのに。練習相手にもなれない…」

「その目ではしょうがないよ、おっとこんなことしてるとハーティアに怒られるな。」

サララを優しく下ろす。サララさんはモンスターの毒で左目の視力がほとんどないらしく、そのせいで冒険者を引退したのでそうだ。

そのとき、ケインの横にいたラルゴがルークのもとに突進した。そして正座して、

「師匠！弟子にしてください！」

炎のように燃えた瞳をルークに向けてラルゴは大声で叫んだ。

小さな依頼（前書き）

ヒロイン登場です。

小さな依頼

天気の良いその日、ケインはサラさんから依頼された洗濯物を干しを終えてからハウスの共有フロアに向かいカウンターに座った。サラさんはもういない。用事を済ませるために出かけたのだ、遅くなるらしい。

今、ルークのチームはラルゴを連れて依頼をこなしに旅立っている。ケインはサラさんと二人きりで留守番である。

カウンターには課題が置いてあり、サラさんが戻って来る前に終えなければならなかった。

「……ええと、戦っている最中、依頼人が別のモンスターに襲われました。あなたならどうします……か。」読みあげながら、頭をひねる。

コンコン、と扉を叩く音が響いたので玄関に行き扉を開ける。

そこには、ケインより1、2歳年下と思われる女の子が立っていた。

「あなたは、冒険者ですか？」

「はい、新米ですが。」

「よかった、あなたに相談……依頼があるのですがお願いします。」
ぺこりと頭を下げてくる。

「……今、担当の者が出払っておりましてその後ではいけませんか？」
正直ケインは焦った、以来の受け方も知らないのだから。

「あなたに、です。話だけでも聞いてください。」

その勢いに押されて、なかに通ってしまった。

—————

結局、話を聞いてケインは依頼を受けた。今、2人で移動している。パーティーハウスにはサラさんに当てた手紙をおいて来た。

内容は、紛失物の探索依頼だった。大事な預かり物のネックレスを

紛失してしまったそうで、今向かっている草原で落としたのはほぼ間違いないのと言う。ただ、そのものの自体の価値は低く、彼女（マリアと名乗った）もお金はそんなに持っていなかったらしく他では断られたらしい。

「今日中でないといけないので、ゴメンなさい…。」

「僕に謝る必要はないよ…。」

ケインも最初断ろうとしたが、”謝れば許してくれる人です。でも見つけれられる可能性が少しでもあるなら、私はそれをお全力でしたいのです。”と言ったときの瞳に強い意思を感じた。心が動かされた、この人を今日は見ていたい思った。その為にサラさんに怒られてもいいと…ちよつと思つた。

指定した場所に着くのは多少時間がかかった。本来馬車でいくべき距離なのであるが、時間もお金も無いので、身体強化してお姫様抱っこして走つた。最初怖がつていたが、スピード感が気に入つたのか途中から喜んでいた。

「じゃあ、落としたときの行動を教えて。まず、その範囲を探してみよう。」

「はい、…ええと。」

2人で歩き捜して回る。昼頃になつても見つからな方なのでお弁当を食べた。サララさんが作ってくれていたサンドイッチを持って来たのだが、2人で半分こした。マリアは随分喜んで味わいながら食べていた、きつとお腹が減つていたからだろう。小鳥の鳴き声がよく響き渡る、一心不乱に探したからか、心が気持ちよかった。このところ、ケインは気分が良くなかった。ラルゴと離れたこともそうだが、この先自分がどうしたいのか、イマイチわからなくなっていたのだ。探し物一つに全力を尽くすこの娘の姿が羨ましいと思つている。

「ありがとう、すつごく美味しかったわ！」

笑顔でマリアはお礼を言つて来た。作つたのはハウスの人だからと返事を返して、また探し物に戻つた。

その後、範囲を広げて探すものの見つからなかった。

「…時間だわ、…終わりにしましょう。」

マリアが時計を見ながら終わることを伝えて来た。

「もうすこし、いいけど？」

帰る時間が遅くなるからあまり進められないが、一応聞いて見た。

「いえ、この時間までと、決めていたから。気を使ってくれてありがとう。」

それから草原を抜けて道に出たあたりで、さりげなくマリアを見た。唇を噛んでいるが瞳は後悔していないと語っているようだった。

「私なんかの、こんな小さな依頼の為に一日付き合ってくれて、本当にありがとう。本当に本当に感謝しているわ。」まっすぐ自分の目を見つめながら語る彼女に胸がドキツとした。知らず、一歩下がる。

(?)

靴の裏に違和感を感じ、足をどけてみると何かあった。

「それ！」

マリアが急いで拾い上げる。

「すごい、見つかった！」

ありがとう！と何度も繰り返す彼女に、照れながら運がよかったねというのが精一杯だった。

帰りもまたお姫様抱っこだったが、疲れていたのかすぐマリアは寝てしまった。おかげでドキドキしているのに気づかれないで良かったとケインは思いながら時々彼女のかをお見つめた。

昨日までのつまらない気分が吹き飛んでいた。ケインの心は炭火のようなじんわりとした暖かさに包まれている。今日は、とても疲れたが大きな収穫を得た。

「ありがとう、マリア。」

心から彼女に、…落し物をしたことに感謝した。

両手に花で初クエスト（1）（前書き）

遅れてすみません。

両手に花で初クエスト（１）

カタコト、カタコト…馬車の揺れが眠りを誘うのにあがらながら集中力を維持する。

今は、依頼人の荷馬車に乗って移動しながらアビリティの修行中である。街の近郊にある村からの依頼で討伐系のクエストである…zzz。

「寝るな！」

と隣の人物に手加減なしで叩かれた。

「…すいません。」

まずは謝る。これが大事だとここまでの道中で学習した。

「誠意の無い謝罪などいらん…、全く鍛えがいのない弟子だ、ラルゴは剣もアビリティも筋が良かった上に礼儀を知っていたぞ。」

…ナゼ？を心の中で繰り返す。

今隣にいるのは２人。１人はサララさん、これはいい。今回の依頼は冒険者ギルドから取得したギルドクエストだ。因みに先日マリアから直接引き受けた仕事はハウスクエストというそうだ。僕の為に軽めの依頼をサララさんが請け負ってくれて、２人で行く予定であった。

だが、なぜかもう１人、ここにいるはずのない人物がいる。紋様術師のタチアナさんだ。

「アビリティは集中力が大事だ。せつかくわかりやすい私が紋様を描いてアビリティが安定したのだから今度は持続的に発動できなくてはいけないのだ。」

「…えつとこの前、他の人に紋様を描いてもらったから師匠が描いたんじゃないですよ。」

一応呼び方は”タチアナさん”、ではなく”師匠”にしてある。

タチアナさんは一瞬狼狽えてから、

「き、昨日メンテナンスしたではないか！だからもう私が描いたよ

うなものだ！そんなことよりもっと集中！」

と黙らされてしまった。

サララさんは修行の邪魔になるからとずっと静かにしている。

両手に花といえは聞こえはいいが…、ケインは昨日のことを思い出していた…。

――――

パーティーハウスの共有フロアでサララさんから今回の依頼のレクチャーを受けていたとき、コンコン、とドアをノックする音が聞こえた。

ケインが玄関の扉を開けて…すぐに閉めた。

「誰？」サララさんが聞いてきた。

「誰もいんです…目の錯覚だから気にしないでくだ、あば！」

蹴飛ばされて開いた扉に吹き飛ばされて奇声をあげてしまった。

「…元師匠を目の錯覚と言うとは…教育が足りていなかったか？」

「アルパカ40ナイツ？」

そこには、あり得ない格好のタチアナさんが立っていた。

「あなたが、サララさんですね。私は紋様術師のタチアナと申します。王都でこの者の師匠をしておりました。まずはこの紹介状を。」

「タチアナさんは絶世の美女ですが、天変地異があらうとこんな格好はしません！ニセ者です！」

「今の発言、前半は事実だが後半は違う、私に似合わない服はない！」

「会話がずれてません？それと…私からいうのもただけど…本当にうちに入りたいの？」

サララさんは渡された手紙を読んでから、タチアナさんに少し不思議そうに問いかけた。

「フム、では説明しよう。紋様術師のギルドの老いぼれ達が私から仕事を取り上げたのだ、それも裏から卑怯な手で。故に王都で稼げ

なくなりこちらで、紋様術以外で研究資金をかせがねばならなかったのだ。同じ女性という事で、リシエル老師が助け舟を出してくれてな。」

「そう言えば、アルパカ40ナイツのルビーさんはリシエル老師のお弟子さんでしたね。」

「そう、それでアルパカ40なんかの原石チームとやらにいられてもらったのだが…。」

そのもの達が私の事を心配してくれてな、まずは冒険者のイロハをという事で、こちらを紹介してもらった。」

それは追い出されたんじゃない？とは口が裂けても言えないなとケインは思った。

「まあ、いいですよ。紋様術師なら紋様陣を使えるでしょうから。」
「えっ？えっ？試験は？モーニングスター（実技試験）は？」

「うちは大きなパーティーハウスじゃないから試験はないのよ、テイ君がやれって言うから。雰囲気を楽しませたいっていったけど、からかったただけよ」

「な〜？」

信じられない事があまりにもありすぎて。倒れてしまったケインであつた。

両手に花で初クエスト(2) (前書き)

感謝・感謝です。

今回は戦闘があります。

表現は控えましたが好きでない人は飛ばしてください。
初シリアスです。

両手に花で初クエスト（２）

ケイン達３人は、依頼のあった村に無事到着した。そして、依頼内容の確認作業に入る。

「…では、状況はかなり変わってきてますね。」

サララさんが村の代表の若者と打ち合わせをしていたので、ケインは同席した。何事も経験である。

「はい、ですので依頼の内容を変更させてください。お願いします。」

若者は素直に頭を下げている。

「ここまで内容が変わると受ける事は…、ではまず、現状の確認をさせていただきます。受けるかどうかはその後にさせていただきます。」

キツパリとした言い方なので相手に意思がはっきり伝わる、サララさんは流石だなとケインは思った。

出来もしない仕事をうけられると期待させてはいけないのだ。

内容は、始めスキンヘッド猪の討伐だった。つがいが作物を荒らし、てしまうらしい。大きすぎて手が出せないとの事で、冒険者にいらすすることにした。だが、その依頼を出している最中に、大鬼^{オーガ}があらわれたのだ。初心者^{初心者}の冒険者では荷が重い。サララさんの実力なら視力に不安はあるが大丈夫であるだろう。だが予定外の事態には慎重になるべきだと伝えてきてた。ケインもそう思う。スキンヘッド猪でも決して容易な相手ではないのだから。オーガは何人もの村人が見かけ、１人は捕まって食べられそうになったらしい。その上、１人木こりの若者が行方不明になっているという。

その話の後、ケインは畑に向かった。

確かに、ひどく荒らされている。ケインは農村出身なのでコレがスキンヘッド猪の荒らした仕業だとすぐわかる。…しかし、大きな足跡も見つけた。

(…オーガが畑に？人を襲う為？)

よく見ると、キュウリやトマトが引きちぎられている。高さに猪ではない。さらによく調べて見ると、大根と人参が引き抜かれて持ち去られている…これもスキンヘッド猪ではありえない。

「ここに来た、オーガはベジタリアンなのかな？」

調べた事をサララさんとタチアナ師匠に伝えてから、自分の意見を言う。

「そんなわけがあるわけなろう、第一1人食されているではないか。」

「そっちの可能性が高いけど、…生きている可能性もあるわ。私は受けようと思うけどケイン君の意見を聞かせて。」

決定権はリーダーのサララさんにあるが、今回のクエストはケインの修行用である。

(…これは、試されている？)

「受けるべきだと思います。今回の依頼の優先順位は人命救助、本来の依頼のスキンヘッド猪の討伐、オーガ退治の順にするべきです。」

サララさんは上出来と言って頭を撫でてくれた。年下扱いは遠慮願いたい、師匠も真似すんな！

結局依頼を受けて、夜待っていると、スキンヘッド猪が2匹現れた。言われていたとおり大きい。

「ケイン君、後方に回り込んで1匹お願いね。後、わたしだと逃げられてしまう恐れがあるから、そのときは無理しない程度に追いかけてね、本当に無理しないでね。」

了解の意思を伝えてから飛び出す。月明かりで比較的戦いやすい。サララさんは目が悪いので、近くに師匠が松明を持って待機している(まだ火を付けていないが)。

ケインの動きに1匹が頭を向けた。畑は足場が悪いので林の近くで構える。武器の短剣はまだ抜いていない。突進してくるスキンヘッド猪を静かに見つめた。

（命がけ、生きるために僕を殺そうとして向かって来ているのがわかる、必殺の意思が瞳にこもっているね…。僕も、サララさんも、村人の命のために、必殺の決意です…あなたの命をいただきます。）
アビリティを発動していたせいか、異様に時間が長く感じられた。
スローモーションの世界でスキンヘッド猪の、額から突き出たスキンヘッド部に両手を当て横に押す。スキンヘッド猪は全体重をかけた突撃の勢いが首にかかり骨が折れた手応えがあった。自分が今、1つの命の灯火を消した事を全身で感じた。

その後、サララさんお方も無事倒した。

「猪の解体は村人に任せましょう、あと見張りもお願いして、私達は明日に備えましょう。明日は早朝から行方不明者の探索に行きます。」

「了解した。」

「はい。」

自分の声が思ったよりもかすれていて自分でびっくりした。

その夜、当てがわれた村長の部屋に3人で寝た。1人で寝ると言ったのだが、2人が強引に一緒に寝ると行って布団を持って来た。

（両手に花でラルゴにうらやましがれるな。）

そう思いながらケインは布団を頭からかぶって、…震えが止まらない自分の身体を只々抱きしめていた。

両手に花で初クエスト（3）

ケインはサララさんとタチアナ師匠とともに、天然の洞窟の前にいた。オーガの足跡をたどって山の中を歩いて行くと、意外と簡単にたどり着いた。オーガの足跡はわかりやすい上に引きずったようなあともあり追跡はたやすかった。

明かりを用意して洞窟にはいるとそこにはオーガがいた。こちらを見つめながら横になっている。体長が3m近くあるその姿は恐ろしいものだが、肋骨が浮き出ており弱っているのが伺えた。足に木を添えてツタでグルグル巻にしてある。周りには食べ物が散乱していた。

「足を怪我して弱っている見たいね。でもケイン君情けは禁物よ。」サララさんが武器を構えて近づく。オーガは諦めたように目を瞑り横たわった。目から涙を流している。

（情に流されるな…、冷静になれ！）

ケインには何かが引つかかっていた。かわいそうだから？違う。悪さは何をした。畑を荒らして、人を1人…。畑？本当に木こりを殺したのか？周りを見回した。キュウリ、トマト、大根、人参…

（生で食べれるものばかり、…まさか！）

「…あなたは、行方不明の木こりさんですか？」

洞窟内では音がとても響く。小声ではあったが、オーガの耳に届いたようで、驚いたように上体を起こし、なども頷いた。

何かを伝えようと喋るが、牙が多い口のせいか言葉にならない。

「あなたは、うまく喋れなくなった、そして、文字もかけない？そうですすね？」

泣きながら何度も何度も頷いた。

「そんな事があるのかしら？」

サララさんは驚いていたが警戒を解いていないらしく、武器をおろしてはいない。

「師匠、何か心当たりはありませんか？」

「…一つだけある。」禁忌”触れたのだろう。」

師匠は少し自信なさげにつぶやいた。

両手に花で初クエスト（４）

「禁忌、ですか？」

ケインは聞き慣れない言葉だったのでタチアナ師匠に質問をした。

「可能性が高い、というだけで確定できん。」

タチアナさんは三步オーガに近づき、

「何時に質問をする。首を降って答えよ。」

オーガの木こりさん（仮）は頭を縦に降った。

「なんじは、神の祝福を受けて、アビリティを使えるようになった。」

コクリと縦に降った。

「汝のアビリティは動物などに变身することができるようであった。」

また、コクリと縦に降った。

「汝はそれを誰にも言わなかった。つまり王都へ行くのを嫌がった。そうだな。」

少し横を向いて、ばつが悪そうに首を縦に降った。

「隠れているいる变身していたのだろう。しかし、オーガに化けてたら元に戻れなくなった、それで困ってこんなことになっているところか。おおかた、足はスキンヘッド猪にでもやられたのであろう。」

オーガの木こりさんは泣きながら首を縦に何度も振る。

「確定だな、”非自然体への変化による禁忌抵触”の状態だ。」

タチアナ師匠は今度は自信を持って言い切った。

両手に花で初クエスト(5) (前書き)

お気に入り登録してくださった方々…、読んでくださった方々…、
作者は感謝・感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

両手に花で初クエスト（5）

タチアナ師匠の説明は続く。

「アビリティとは、神や精霊などの祝福、送られたプレゼントだ、自分の力ではない。あくまで大いなる存在から力をもらっているに過ぎぬ。」

アビリティはときどき使えなくなるものがある。それはその神の怒りに”禁忌”に触れたからだと言われている。

アニマルチェンジの場合、モンスターに姿を変えたときがそれだ。いくつか報告例がある。モンスターは魔神が作り出した眷属だからという説がある。王都に行けばいずれかの紋様術師に説明されていたはずだ。」

つまり、隠していたために知らなくてはならない危険を知らず、使い方を誤ったということか。

「”禁忌”に触れた為に、神の怒りに触れた為にアビリティを取り上げられたのだ。そのままの姿でいるしかあるまい。」

オーガの木こりさんが泣きながら声を上げる。

「なんとかならないのですか？」

「姿の戻し方など知るわけがなかるう。」

「…でも、師匠ならなんとかなるでしょ？」

うっ、とタチアナ師匠は少し呻いた。

「まあ、うむ、調べて見ないことには。」

「流石ですね、絶背の美女で、天才紋様術師なんて師匠しかいません！」

「あつ、当たり前のことを言うな。おまえ、絶対動くなよ！」

タチアナさんはオーガの身体を観察し始めた。ときどき手をかざしてブツブツと呪文を唱えている…。

「…欠損している、…いや、うむ…、これは…、従来の説を覆せるかもしれない…。」

そして、オーガの木こりさんの顔をみながらタチアナさんはまるで断罪の審判官のように冷たく言い放った。

「もしかしたら元の姿に戻るかもしれない、だがかなりの痛みを伴うぞ。しかも失敗して死ぬ確率の方が大きい。…どうするか選ぶがいい。我が紋様術、受けてみるか？」

しばしの間をおいて、オーガの木こりさんは頷いた。

タチアナさんは筆を取り出してオーガの身体に紋様を描く。

「アビリティを活性化してその力を使い切らせる。それまで身体が持つか運次第だ。」

アビリティに反応してか紋様が浮かび上がる。オーガの木こりさんが泣きながら、悲鳴をあげ、転がり回る。

「私は、外を見てるね。」

そういつてサララさんは洞窟を出ていった。

ケインはタチアナ師匠と共に成り行きを見守る。

30分ぐらいした頃だろうか。痛みに失神して、ピクピクと痙攣していたオーガの身体が歪み始めた。ゆっくりと人間の姿を取る。

タチアナ師匠が息を確かめた、なんとか大丈夫のようだ。

「バカ弟子よ、アビリティは諸刃の剣だ…。覚えておけ。」

言い方は冷たいが、師匠の声になぜか優しさを感じるケインであった。

両手に花で初クエスト(6)(前書き)

いつも感謝・感謝です。

両手に花で初クエスト（6）

サララさんが語ります。

（フニフエリヤ〜♪）

サララはへロへロになってフラフラしていたところへ彼が現れたので寄りかかった。

「こんな無茶をするなんて、あなたらしくもない。」

そういいながら彼は私を横たえて膝枕をしてくれた。

（シ・フ・クの時間♪）

「いつもなら3人で迎え撃つところでしょう。ただでさえ…」

彼をかばって毒を受け、左眼の視力をなくしたのだ。そのことを彼は誰よりも気にしている。

「本格的に復帰するには辛いかな〜。」

「するつもりですか？」

「私もヤツパリ冒険者なもの♪、まあ復帰は取りあえず、ケイン君達の初心者マークが取れるくらいまでかな？ハウスのこともあるし。」

「ケイン君達を気に入ってくれたみたいでよかったですよ。」

「ケイン君は、あれね、戦いになるとスイッチはいるタイプね。それでいて昨夜は震えていたの、カワイイよね♪」

「そうですか。」

少し嫉妬が入ってる♪あなたもカワイイ♪と思いながら、

「そうね、できれば彼みたいな子供が欲しいの♪」

思った以上に、とってもとっても動揺してくれた。

（カワイイ♪）

「…ケイン君が来ますね。」

彼の膝から頭をどかし自分の腕をまくらにして目を瞑る。

彼が姿を消すのを見るのは好きではない。

「サララさん！」

ケイン君が驚きの声をあげて駆け寄ってくる。

「怪我を、まさかオーガ？」

「このくらい大丈夫よ。あのね、アニマルチェンジは対象をよく知っているか見てないとダメってルークがいつてたの。つまりこの辺に本物のオーガがいるかしらって当てを付けたの。仲間（？）の悲鳴を聞いたら来るんじゃないかなって思ったら当たったわ。」

「どうして呼んでくれなかったんですか！」

「今のケイン君にはアビリティの知識を強化する方が戦闘経験より重要よ。」

納得のいかない顔のケイン君に、

「それより安心しないで、周りを調べて。オーガが1匹だけとは限らないもの。ハウスに帰るまで油断は大敵よ。」

と言ったら、全力で警戒を始めた。

本当にカワイイと思いながら、サララは意識を開放した…。

両手に花で初クエスト（7）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

両手に花で初クエスト（7）

「…ラル、僕もうダメだ！」

ケインは諦めたような声を出した。

「諦めるな…諦めたとき全てが終わる。って寝るな！」

ケインはカウンターで突っ伏して居た。今、2人はそれぞれの初クエストの報告書を書いている。ラルゴの方も進んでいないみたいだ。ギルドクエストは報告書を提出しなければならない決まりである。なんとか気を取り直して続ける。

「夜にスキンヘッド猪を2匹退治つと。その翌日森でオーガが1匹現れたが退治つと。」

”遅咲きのすずらん亭”の共有フロアはサララさんやタチアナ師匠、ルーク達で賑やかだ。ときどきサララさんが進行状況をチェックにくる。

「どこまで進んだかしら？」

また来て、サララさんが聞いて来た。

「もう全部で来てるぜ！だから俺もあっちに行くぜ！」

ラルゴがさりげなく裏返しにして提出して逃げようとしたが捕まりチェックが入る。

「再提出！コレじゃ依頼人が退治したことになるじゃない！」

「えゝ、でもゝそういう依頼だし…！」

サララさんはハウスの仲間がいかにも活躍した風に書かないとか、アピールが足りないとか、沢山の注意してみんなのところに戻っていった。

「ふえゝ。なあケイン！そっちはよかったよな両手に花で。コッチは男ばっかだし。」

多分言われると思った事を言われて苦笑する。

「まあな、サララさんは頼りになるし、師匠は格好はともかく知識が豊富だし。」

「俺はタチアナさん、アルパカの制服似合ってると思うぜ！」

「そりゃあれだけの美人だし、何を着ても似合うよ。」

「でも、残念だよな。帰っちゃうなんて。」

そう、タチアナ師匠は今回の件で王都に一時帰還することになった。アニマルチェンジのアビリティの持ち主が”禁忌”に触れモンスター姿になった者は2度もとの姿に戻れないというのが今までの定説だった様で、それを師匠は覆したかたちになる。暫くは紋様術師達はそのことで騒がしくなるだろうと師匠は言っていた。そしてもう1度足場を固め治して、王都で研究生活に復帰できる様にする。…。帰り道、そう言っただけで遙か遠く王都を見つめていた師匠の目はキラキラしていた。ケインも師匠は冒険者より紋様術研究の方が似合うと思う。

（本当に紋様、好きなんだろうな。あんな風に何かに打ち込める人はどれだけいるのかな。）

少し考えることに夢中になって手が止まっていることに気付き再開しようとして、ふと気になったことをラルゴに聞いてみた。

「ラル、今いいか？、僕たちのアビリティのことなんだけどな…」

「2つかもってこと、っだろ？」

「ああ。今回の件でアビリティのこと、タチアナ師匠みたいな専門家に相談した方がいいと思っただ。」

「ていうか、タチアナさん知ってたぜ。」

「えっ！」

「俺、王都を出る前に一度タチアナさんにあっただじゃん？その時にね。」

「なんで黙ってたんだよ。」

ラルゴは少しばつが悪そうに、

「…そうしろって。なんか、理由は教えてくれなかった。」

ケインはタチアナの方を見た。視線が合ったせいかこちらに来る。

「私へのことでも話題にしていたのか？」

お酒を飲んでいたのだろうか？頬が赤い。

「僕、アビリティが2つあるかもしれないんです。師匠は知っていますか。」

師匠は一瞬ラルゴに視線を送ってから、

「話したのか。」 禁忌” が気になって相談する気にでもなったか？」

「はい、でもなぜそれを僕にいわなかったんですか？」

「いうことを禁じられていたのだ。そのことについては詳しくは話せんが。だが、ちょうどいい。話せることを話しておこう。」

師匠もカウンター席に座った。

「お前達のアビリティは紋様術師達の研究心を刺激しているのだ。」

これから、フーバー老師の門下でラルゴが、リシエル老師の門下でケインが研究される。ちなみに私をリシエル老師が拾ってくれたのはそれも関係する、一番よく知っている立場だったからな。」

2人の反応を確認するかのように間を置いてから、

「そんなに心配するな。とって食われるわけではないぞ。」 禁忌” があるかどうか調査してくれるだろう。お前達は今までどおりしていれば良いのだ。」

「僕たちのアビリティかどんなものなのか、師匠は知っているんですか？」

「わからん…紋様術師としては悔しいの一言だ。」

それでも、ケインは心が軽くなるのを感じた。研究対象にされることとはいい気がしない、だが自分達だけの秘密にするのはすでに辛くなっていたから。

「もう今日は気にするな…それよりここが間違っている！」

師匠はケインの報告書をみていった。

「…現在最高の天才美女と書かなければ…表現力が稚拙だな。」

（これは、場を和ませる為の師匠の気配りだよな…たぶん。）

「なんにしても、ラル、早く終わらせようぜ。向こうの、初クエスト祝勝会が終わってしまう。」

冒険者にとっての初クエストとは特別な意味を持っている、成功し

た初の印クエストのことをいいパーティーハウス総出でお祝いをするのである（ ）。

「…主役を外して盛り上がってるんだからこのハウス、おかしくない？」

「ここ楽しいと思うよ。」

ケインはアビリティを持ったことで、随分賑やかな人生になってきたなと思った。

自分にとってそれは良いことなのだ…。

両手に花で初クエスト(7) (後書き)

夜中に目が覚めてしまい、アクセスを確認したらアクセス数が多くて、嬉しくなって書いてしまいました…眠…zzz。

() 最初のキラキラ蟹のクエストはサララによって失敗と判断された。

ラルゴの初クエスト（１）

少し時間は遡ってラルゴの話です。

宿のそばの公園でベンチに静かに座り鳥を見る。ラルゴは今、アビリティの特訓をしていた。

今回のクエストは、ラルゴのアビリティの訓練を兼ねての軽めのものだという。ただ、ルーク師匠はクエスト内容は必要になってから伝えると言って説明をしてくれなかった。もう一人の同行者、ドワーフのドウンガさんも教えてくれなかった、暫くすればわかる言っ

（ともかく集中！）

特訓の内容は鳥の観察だ、鳥になって空を飛べるようになると色々と便利だということでアニマルチェンジの新しい変身対象は鳥に決まった。近くの地面にいる雀を見る、枝に止まった鳩を見る、空を飛ぶカラスを見る。

降りてきたカラスが枝に留まったら、嫌がって鳩が逃げていった。カラスが小首をかしげて飛んで行った鳩の方をみていた。

（女の子に逃げられたケインみたいだ。）

村にいた頃、よくあった光景だ。ケインは女の子をいじめることはなかったが嫌われていた。いや、本当に嫌っていたのではなく眼つきが鋭いので見つめられるとコワイからという程度なのだが。

そんな風に修行をしていると、ドウンガさんがやってきた。

「修行中悪いが来てくれぬか。依頼人が到着したので挨拶に行く。」

（さあ、いっちょ気合いれますか！留守番のケインには悪いけど。）
気合の入るまくりのラルゴはドウンガのあとをついていった…。

ラルゴの初クエスト（２）

今回の依頼はギルドクエストなのだとドウंगाさんが歩きながら教えてくれた。

「冒険者のギルドで受け付けた依頼を各パーティーハウスで受けるのじゃ、このとき、今回のように相手がわからぬ事もある。」

「相手が誰か知らないんですか？」

「依頼を受けた冒険者ギルドは知っているだろう。だが、誰が依頼人か、仕事の直前まで伏せられる事はよくある。今回の依頼は狩猟の付き添いということだ、貴族かもしれん。」

「貴族相手に依頼内容が良くなって引き受けないとか、ここまできて断る事もできるんですか？」

「場合によるが、出来る。最もそうならない人選をするのもギルドの仕事だ、よほどの事がない限り断わる事にならないはずだ。」

「もしかして、その狩猟の付き添いつての内容もよく知らされていない？」

「そうじゃ。」

（つまり、依頼を俺に教えなかったんじゃないで、教えられなかったのか。）

やがて高そうな宿に着く。今自分達が泊まっている宿より１０倍以上はお金を取られそうな宿であった。

中に入って一室に通された。すでにルーク師匠が誰かと話している。

「おっ、来たな。コッチコッチ。」

師匠に呼ばれて横に並ぶ。

「俺を含めて改めて紹介をしよう。ララカルの街の冒険者パーティーハウス”遅咲きのすずらん亭”のルークと、ドウंगा、ラルゴだ。今回の依頼引き受けた、万事任せてくれ。」

陽気な声で相手に紹介をした。ドウंगाさんに続きて頭を下げる。

「お引き受け頂いてありがとうございます。ではこちらも改めて、

こちらはマドリー家のヒューズ様とご親友のアドラー家のヘイズ様にございます。私目はマドリー家の者でヒューズ様のお世話をもうし使っておりますセバステアンと申します。他にも使用人がついて来ておりますが、必要に応じてご紹介申し上げたいと存じます。」

羊さん、いや、執事さんで初めてみたなあとラルゴは思った。それより、貴族の2人は服装も、身だしなみもしっかりしていて参考になるなと思った。歳はラルゴより1、2上か？

「ヒューズだ。世話になる。」

「ヘイズだ。よろしくな。」

「顔合わせも終わった事だし、宿に戻ろう。セバステアンさん、待ち合わせ時刻は早朝4時でいいですね。」

「はい、よろしく願います。」

「では、ヒューズ様、ヘイズ様、また明日。頑張ろうな。」

少し軽い言い回しだったが、気にせずにごやかに2人が手を降ったのでルークさんは信用されているのだろう。

宿に戻って打ち合わせだとルークさんに言われて宿に向かって歩き始めた。

ラルゴの初クエスト(3)

「マドリー家は男爵、アドラー家は子爵の爵位を持つ貴族だ。まあ、2人の母親は姉妹で王都の有力商人の娘だ。この姉妹と俺はちよつとした知り合いでね。あいつらもちっちゃい頃ならあつた事がある。おそらく、それでご指名されただろう。黙つてたのは驚かすように母親に言われてたつて。昔からあの人達は俺をからかうのが好きなんだよな。」

説明しているルーク師匠はかなり嬉しそうだった。

「懐かしいもんじゃ、人間は成長が早いのだ。」

随分と感慨深げにドウंगाさんも言葉を漏らした。

「ドウंगाさんも知ってる人？」

「小さい頃だ、向こうは覚えておらんだろう。ルークは今だに毎年誕生日に何か送っているようだが。」

流石師匠、勉強になります。

「それで内容は？」

「近く若い貴族の為の狩猟大会があるらしくてな、その為の特訓だと。」

なるほどね、と思うが力が抜けて来る感じがする。

「その顔は楽な仕事って思ってるだろ？」

笑いながらルーク師匠は声をかけて来た。

「まあ、そうかな？つて。」

「楽かもしれないが相手は貴族だ、…大怪我でもさせれば死罪だつてあり得るんだ。いくらアビリティ持ちでも許されないこともある…覚えて置いてくれ…。」

笑いながらコワイことをいわれたよ。

ラルゴの初クエスト（4）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

総合ユニークのカウントが10000目前です。

ありがとうございます、本当に嬉しいです。
。

ラルゴの初クエスト（４）

貴族の依頼、ヒューズとヘイズの狩猟に付き合って１つ週間ほどが過ぎた。朝早く狩りに出掛け昼にはもどり、午後は村の射的場で弓の練習や剣の練習をした。ラルゴはその間はルークさんにアビリティの特訓を受けていた。

ラルゴは貴族の２人と仲良くなっていた、身分の差はあるが中身は若者、話が合ったのだ。

「それでケインのやつはな、さんざん迷った拳げ匂に買ったばかりのプリンを落っことしてな、ミーナちゃんはカンカンだったよ。」

「そりゃダメだ。」

「で、結局告白をしようとしたんだがする前に断られちゃってさ、で、やけ食いに付き合ってたって落ちさ。」

「あはははは！よしヘイズ！俺達はケインのようにならないように頑張ろうな！」

「だな！よし、今日こそは大物し読めようぜ。」

２人と弓や剣の技術は互角と言ったところか。やはり貴族と言ったところだ。

ヒューズの話によると１０歳から１年の半分は学院の貴族専用寄宿舎で集団行動を学ぶそうで、その中に戦争の技術も含まれているらしい。

「俺達は、貴族としては下位だからな。戦争が起こったら、なにさせられるかわからないから色々覚えさせられてるのさ。」

もつとも、今２人にはヤル気はあっても緊張感がない。それもそのはず、実は狩猟大会は理由であって目的ではない。本当の目的はこの練習を理由にここで会う事だ。学院で仲良くなった女の子に声をかけていたのだ。つまり、ハンティング中に恋のハンティングをするのが最大の目的なのだ。今日の午後にも意中の女の子達が到着す

る。2人とも明日いいところを見せると張り切っているのだ。ケインの話もそんな雰囲気話をしていた出て来たのである。

（武士の情けでミーナちゃんが俺に告白して来た件だけは伏せてやっただけ、感謝しろよな。）

ラルゴはケインに勝手な恩を売っていた、本人が聞いていたらものすごく早いツツコミがかえって来てただろうなと思いつつながら…。

ラルゴの初クエスト(5) (前書き)

総合ユニーク1000突破しました。

本当に本当にありがとうございます！

ラルゴの初クエスト(5)

女の子達が到着する日のお昼過ぎ、ラルゴは井戸水で軽く汗を拭いた。貴族の2人は宿に帰って風呂を浴びたり着替えたりするそうだ、おめかしするのだろう。2人のオシャレ能力は高いのでラルゴとしても今後の参考にできるだろう。

夕方には明日の狩猟のための打ち合わせがあるため、ルーク師匠はその準備で忙しい。ラルゴは1人で暇を持て余していた。

公園のベンチで修行の一環で鳥を見るがなんとなく女の子達が気になって集中できない。

(貴族の女の子ってどんな格好なのだろう？仕事だから服装は選べないけど田舎者って見られないかな？)

女の子の前では度胸があるラルゴではあるが、自分に絶対の自信があるわけではない。それでもケインと違って、”なるようにしかないだろう”という性格な分だけリラックスした会話が出来る。

取り止めのない事を考えていると、公園に2人の女性が入って来た。若くてメイドの格好をしている。

(もしかして、貴族の女の子達の召使かな？)

1人と目が合ったので、和やかに微笑み返す。向こうも安心したのか声をかけて来た。

「こんにちは！あなたはこの村の人ですか？」

「こんにちは、この村のものじゃないよ。ララカルから来た冒険者さ、ラルゴっていうんだ、よろしく。ここに狩猟に来ている貴族様の手伝いをしに来てるんだよ。」

自分の仕事まで説明したのは、おそらくこれで何か反応が帰ってくると踏んだからだ。

案の定、2人は一度お互いの目を見つめあってから、最初に声をかけて来た子が、

「それはマドリー家かしら。私達は、マドリー家のご子息からご招

待いただいたジノ家の召使です。」

「それは偶然ですね、ここへは？」

「早く到着したので散歩です。よろしかったらこの辺りを案内していただけますか？」

…急に元気が出て来て2人に了承の回答を伝えたラルゴであった。

ラルゴの初クエスト（6）

今回の狩猟の練習の場になったこの村はロロナトという村で、狩猟の場を貴族達に提供して収入を得ている。今回のラルゴ達の泊まった宿は貴族の使用人などを宿泊させることが多い。隣接するほどではないが、貴族達が泊まる宿が近くにある。ちなみに宿泊中の警備は依頼の対象外である。

今、高級な宿の方には、マドリー家、アドラー家の息子と、その息子が招待したリアルマ家、シーマ家、ジノ家の娘達が宿泊している。

夕方、高級宿の一室で各家の警備を担当する者達とルーク達冒険者との打ち合わせが行われている。

（…どうしょ。）

ラルゴはかなり緊張していた。何故なら、ラルゴの昼間の話を聞いたダウンガさんが確かめたところ、ジノ家は今あまり裕福ではなく使用人は老人が1人ついて来たただだと分かったからだ。

とりあえず、このことを黙ったまま打ち合わせが行われている。

あの2人が何者なのか、何故ジノ家の使用人を装ったかは不明だ。危険を感じるものの、下手に話すとずらん亭の名を貶めかねない。あの2人にはかなりいろいろ喋ってしまっている。

ただ、陰謀ならラルゴを無事に返すことはあり得ないだろうということ、いまダウンガさんが聞き込みに回っている。

ラルゴはルークさんに目の届く範囲にいろ！と言われている。何もさせてもらえない、初心者自分ではまた失敗をするかもしれないからだ。

やがて、打ち合わせが終わり、今日は一度貴族達に顔合わせとなった。

今夜は立食パーティーとなっていてその会場に入ったラルゴは心臓が止まりそうになった…。

ラルゴの初クエスト（7）（前書き）

感謝・感謝です。

ラルゴの初クエスト(7)

(2人ともいた〜！)

会場には5人の貴族がいて、そのうち知っている人間が4人いた。そのうち2人が男性、2人が女性だ。ラルゴは思わず声をあげそうになった。

「マリアベル・レアルマです、皆さんよろしくね。」

「ソフィーナ・シーマよ。」

「エリス・ジノです。よろしくお願いします。」

顔合わせの挨拶が進む。そんな中、自分の顔色を気にしてルーク師匠が小声で声をかけて来た。

(どうした？)

(昼間あつた2人がそこに…、マリアさんとエリーさんが…)

ルーク師匠はホッと息を吐いて、

(…そうか、分かった。)

と言ってダウンガさんの方に向かった。ダウンガさんも話を聞いてホッとした顔をした。

やがて顔合わせが終わり、退室するときになって、

「おいラルゴ！お嬢様方がお前の昼間の活躍を聞きたいってさ！来てくれ。」

とヒューズが声を掛けてきた。ルーク師匠に了解をもらって会場に残る。

大人達がいなくなったのを見計らって、5人が笑い出す。どうやら昼間の話は全て聞かれているみたいだ。

「…嘘についてゴメンなさいね。ラルゴ君。」

エリス嬢が誤って来た。

「悪いのは私なの！エリスを悪く思わないで。私が周りに気づかないで外に出た行っていったから…。」

話を聞くと、エリス嬢は普段、花嫁修行の一環としてレアルマ家で

マリアベル嬢のメイドをしているそうだ。それで今回も来るときはメイドとして働きながら来たのだそうだ。服はエリスの物を借りたのだろう。

ラルゴはどつと疲れた…。一応、不審者扱いになりそうだったことを皆に話すと当の2人は青くなつた…。他の3人は大笑いであつたが。

苦い顔をしているラルゴに、

「まあ、もう忘れようぜ！お前はそんなちっちゃな男じゃないはずだ！そうだろうラルゴ君！」

といってヘイズが茶化す。

「ヘイズ様笑い過ぎ！エリス様、マリアベル様、もうお気になさらず。」

ヘイズに言葉を返しながら、お嬢様方にはフォローを入れる。

「でさあマリア。本当のメイドだったらラルゴと付き合いたいって思つたかい？」

ヒューズが恋のEF話を振ってきた。強引な話題転換で助け舟のつもりなのかもしれないが、それ以前にこの手の話が好きな年頃なんだろう。

（もう俺を開放しやがれ！）

そんなラルゴの心も知らず、マリアベル嬢は変化球で答えを返してきた。

「先に100点見ちゃつたのよねえ、80点かなあ。」

首を傾げる皆に気を使い、この答えを唯一理解したエリス嬢が通訳する。

「実はこの前、ユリアベル様はララカルで1人の冒険者と出会っているんです。その方がとても誠実な方だったようでとても気に入っているみたいです。あつこれ、他の人に秘密にしてくれますか、コッチもお忍びだったので。」

「エリー、今はマリアでいって言うてるでしょ。メイドしないの！それより、ソフィーナは…」

このあと暫くは恋バナで盛り上がる5人であったが、
（抜けるタイミングにがしたゝ助けてくれゝ）
ラルゴの心の声は誰にも届かなかった…。

ラルゴの初クエスト（7）（後書き）

お約束の展開、捻りなし、ですね。

ラルゴの初クエスト（8）

ラルゴにとって散々だった日の翌朝、ヒューズとヘイズの狩猟練習大会が始まった。このロロナトの村は管理された狩猟馬なので獲物は多い。2人とも張り切って別々の方向へ獲物を探しに向かった。ラルゴはヘイズの方に付いていた。ヒューズの方にダウンガさんが付いている。

今ここにいるのは、ヘイズとマリアベル嬢と護衛の2人である。

（最も俺は護衛にカウントされていなくて…）

「それにしても、冒険者の方ってもう少し頼りになると思っていたんですけど、そうでもないのね…。」

ヘイズにマリアベル嬢が少し残念そうな顔で話をする。

「古い果物を食べたってことだからね、まあ、お腹を下してもしょうがないよ…。」

そう言っただけで事実を知っている、ヘイズがフォローする。

実は思ったよりも護衛が多かったのでルーク師匠はアビリティの訓練をしようとして来た。先ほどの理由で2人はいないことになっている。

「いいなあ、その小鳥さんヘイズにばかりなついていて、私の方に来てくれないかしら。」

（絶対嫌だよん！）

小鳥はラルゴが変身した姿であつた…。

ラルゴの初クエスト（9）

ラルゴはヘイズの肩に留まって、小鳥のふりをしていた。

頭を振り、尾羽を小刻みに動かす。普通の小鳥の真似をして、仕草を練習する。マリアベル嬢と護衛の方達に気づかれなければ合格だ。マリアベル嬢は気になるらしく、ときどき手を差し伸べてくるが一度とんで逃げて元のヘイズの肩に泊る。

「いいな……」

「なんか、コツチで餌をあげてたら懐かれてさ。」

「そう！餌！何をあげているの？」

「ええと、コオロギとか……」

「無理ですわ。」

ヘイズとマリアベル嬢は親しい雰囲気でもいい感じではある……。だが、ヘイズの本命はソフィーナ嬢である。というかヒューズもそうである……。ラルゴはこの数日付き合いでそれを知った。

今日はヒューズに気を使ってソフィーナ嬢との仲を取り持つ様に、マリアベル嬢とエリス嬢を誘った。昨日のうちに壮絶な打ち合わせがあつたらしい。

しかし、ソフィーナ嬢が女の子1人は嫌だと言うのでエリス嬢が向こうのチームに入った。これはヘイズには嬉しい誤算であらう、隠れて喜んでいた。

「ねえ、ヘイズはソフィーナが好きなんですよ。ヒューズに遠慮してていいの？」

「ヒューズと俺は親友さ！恋も正々堂々といくよ。今回は順番を決めたんだ、お互い足の引っぱり合いはしない。」

言っていることはカッコいいんだけど、顔は悔しがっている。

そんなとき、獲物が見えた。

「鹿だ……」

ラルゴ（小鳥）が肩から降りると、静かにヘイズが弓を構え矢を放

つ。かきん、と角で弾かれた。

「下がって！モンスターです！」

護衛の2人が前に出るが、素早く近寄って来たモンスターに1人が弾き飛ばされた。

（あれってこのあたりで一番ヤバイっていった一角鹿だ！）

自分も前に…ラルゴは…何に変身しようか悩んだ。

ラルゴの初クエスト（10）

一角鹿はこの辺りにときどき出現するモンスターで当然鹿ではない。鹿のふりをして近づき獲物を狩る。その角が強力な武器だと聞いていたが…。

護衛の人が、相手をしているが苦戦している。モンスターの角に触れただけで剣が大きく弾かれる。角からは変な音が響いてくる。

「ヘイズ、マリアを連れて逃げる！」

変身を解いてヘイズをかばう様に立った。まず依頼人の安全を優先するべきだろう、いきなり現れたラルゴにマリアが驚いた声をあげた。

「嫌だ！俺の方がお前より強いんだぞ！」

確かに剣技ではヘイズの方が上だ。ヘイズは剣を抜きモンスターに向かって走り出した。

「待って！」

ラルゴは犬に変身しあとを追いかけた。一角鹿は新しい相手に目を向け、…その角をヘイズに向けた。

（させないぜ！）

ラルゴはヘイズを追い抜き一角鹿の側面に回り込む。一角鹿はその動きを嫌って大きく横にステップして距離をとった。対峙していた護衛と、ヘイズが並んで剣を構える。先ほど吹き飛ばされた人もなんとか立ち上がり参戦する。3人でモンスターを包囲した様なかたちになる。だが、角が危なくて迂闊に近寄れない。

ラルゴは小鳥になって角が届かない高さを旋回し、気を引く。

（どうやって攻撃する！小鳥じゃなんにも出来ない！）

あの角の様に強力な武器があれば、と思って角を見たとき…角の周りに何かが見えた。

（あれは…風？）

一角鹿の角を中心に風が渦を巻いている。それが分かる。

（そうか！今俺は鳥だから風が見えるんだ！）

見えると言う表現はおかしいかもしれない、感じるというべきか、でも確かにそれが見える。

ラルゴは一角鹿に突っ込んだ。一角鹿は角で迎え撃つが風が見えるラルゴには動きが丸見えだった。逆に角の周りの風に乗り顔に近づく。

チクチク！

クチバシで目をつつく、痛がってモンスターは片目をつむる。

「いまだ！」

死角にいたヘイズが剣を構え突撃する！が、一角鹿は気付いて角を向けた。

（やばい！）

ラルゴはヘイズが串刺しになるのを想像してしまったが、そのとき土の中から黒い手がのびてモンスターの首を掴んで組み伏した。

「ひゃあべっ！」

ヘイズはその動きについていけず、モンスターの体につまずいて転んだ。

地面ではゴリラがモンスターの首を閉めていた、と思ったたらライオンに変身して首を噛んだ…それで戦いは終わった。

変身を解いたルーク師匠が笑ってこちらを向いたが、…ちょっと怖かった…。

ラルゴの初クエスト（11）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

ラルゴの初クエスト（１１）

「ふい〜。」

ロロナト村に戻ったラルゴはルーク師匠と宿の大風呂に入っていた。
「サツパリするな〜、風呂最高！」

モンスターと戦ったときに土まみれになったルーク師匠は、風呂に入る前に念入りに体を洗う。共同浴場は皆のために身体を先に洗うのがマナーだ。

「師匠！質問です〜、どうやってモンスターに近づいたんです〜か？もういいですね。」

その後、マリアベル嬢が怪我をした護衛の人を手当てをして怪我を悪化させたり、マリアベル嬢にヘイズと一緒にあなた達の辞書には勇気と無謀が同じ意味で載っているの！と説教されていたり、マリアベル嬢にアビリティを隠していた罰と言って猫に変身を強制させられてハグられて気絶しそうになったり、マリアベル嬢に他女の子にも吹聴されてハグられて気絶しそう（２回追加）になったり、大変だった〜チョット役得と思ったのは秘密。

「モグラだよ。アレはモグラ、ゴリラ、ライオンの連続変身だ。」
コンボチェンジ

「すごかった！俺、感動でした。」

ルーク師匠は笑いながら、

「…お前だつてできるようになるさ、それより”風”をつかんだよ
うだな。」

そのことを気付いていた師匠にまた驚いた。

「鳥の変身練習の本当の目的って、もしかして？」

「そうだ、鳥にうまく変身するためもあったが、鳥の”力”を理解することが目的だったんだよ。動物にはたくさんの種類の分だけ、
たくさん力がある。アニマルチェンジはそれを使いこなして初めて…楽しめる。」

ラルゴはルーク師匠の言葉を噛みしめる…、

（俺、戦う力ばかり欲しがってた…だからルーク師匠は身近なところにいる、あまり大きな力のない鳥を選んだのか。まだまだ俺は…）

ケインならラルゴの欲しがっていた力を欲しがったかな、など思っている、

「それから、貴族のご令嬢達がここに来たことは黙ってる。」

「なぜです？」

「トラブルの元だからだ。俺の経験上、貴族の女性と関わるとろくなことがない。」

ものすごく同意です…師匠。

ラルゴの初クエスト（11）（後書き）

次のお話でやっと題名とリンクする予定です。

紋様術（１）（前書き）

今回の話では、ようやく紋様術について掘り下げる予定です。

紋様術（１）

ケインとラルゴは全力で走っていた。ラカルの街中心部の街並みは、流石に観光地でもあるので整っている。

「アビリティ発動！」

全力疾走するラルゴ（犬）には普通では追いつかない、”ブースト 身体強化

”により加速される。追いつく、と思ったらラルゴ（犬）は犬ならともかく人間では通りづらい建物の隙間を通られ、また見失う。行き先はわかっているので出現ポイントを予測して移動すると、大通りで発見した。後を追うが目的地点にさきに到着してしまった。

「ゼーゼー、また、負けたあ！」

「ゼー、へへ、じゃ、荷物、出してくれよ、ケイン。」

預かっていた荷物に異常がないことを確認してからラルゴに渡す。

「（コンコン）お届け物、です。」

目的地点、つまりある家の玄関で、受け渡しの言葉を交わして受領書をラルゴが受け取る。

「有難うございました！」

2人でお礼をいって帰りはジョギングのスピードで帰る。

「アレはズルだろ！」

「ふふ、勝利の女神は俺の方が好きなのさ」

「ゼンゼン意味不明！」

2人で会話をしながら帰れるようになったので特訓の成果が出て来てはいるのだろう。

自分たちに”遅咲きのすずらん亭”の先輩達は特訓を命じて来た。

”配達のカエストで体力強化！”である。ただし、鬼ごっこで。負けると（ここでは到着までに捕まえられないか、捕まった場合）恐ろしいペナルティが待っている。受領書は勝利者の証しだ。もちろん品物を壊したりしたら弁償プラス二人ともペナルティだ。

何件かの配達が終わってからパーティーハウスに帰り、鉛板を仕込

んだ服を脱いで水を浴びて汗を流す。この前まではサララさんお手製の”砂の服”を着せられていたが、砂が縫い目から出て来て非常に着心地がわるかったのでクレームを付け絶版にしてもらった代わりにと渡された、夜なべまでしつらしい。

サツパリしたところでパーティーハウスの共有フロアに入るべく扉を開け…閉めた。

「ラルゴ、逃げるぞ！」

「どした？」

「雇気楼がいる、それに見てはならない契約の場面を見てし、ぼへえ！」

扉が勢いよく開けられ吹き飛ぶ。

「待ってたのよ」はやく。」

笑顔のサララさんが2人を招き入れる。

「目の錯覚から雇気楼になったか…どうやら本気で私の治療を受けたいらしいな…、第一雇気楼が”いる”では言葉的に致命傷だ。」

王都に帰ったはずの紋様術師のタチアナ師匠がそこにいた。服装は、またもやアルパカ40ナイツの制服であった。

「お茶目なジョークですよ。それよりその格好は？それとさっきの重そうな巾着袋はなんですか。サララさん！もう受け取ってましたよね今、師匠から。」

やな予感しかしないが聞かないわけにもいかない。

「そうよ、ハウスクエストよ。2人をご指名でね」

ラルゴと顔を見合わせた。

「ケイン今度は…逃走の掛け声は扉開ける前にしろよ。」

それは無理だろと思いいながらも、自分もそうしたかったと思うケインであった…。

紋様術(2)(前書き)

いつも読んで頂き、感謝・感謝です。

紋様術(2)

タチアナ師匠の話、クエストの内容はそれ程悪いものではなかった。
「…」非自然体への変化による禁忌抵触”の状態に関する論文が非常に高い評価を受けてな、以前の地位に戻るまであともうすこしといったところだ。」

この前のクエストで禁忌に触れたアビリティ持ちと出会った。タチアナ師匠の力でその者は救われたのだが、師匠はこのことを論文として術師会に提出していた。

「実績が必要なのだ。ここでラルゴ、あるいはケインのアビリティを解析すれば一気に返り咲くのだが、…まず簡単にはいくまい。しかし、2人を絡めばうまくいかなくとも興味を引く事はできる。今回は絶対に失敗は許されない。堅い策でいく。」

そう語るタチアナ師匠の姿は、いつもより気合が入ってみえた。ケインは正直、その姿にドキリとしてしまう。元々超がつくような美人だ、さらにアルパカ40ナイツの制服があり得ないほどにあって見える。

(この人にもこんな姿があるんだ…)

いつも冷静な言い回しを使うし、感情がないのではと思うときもあった。しかし、今のタチアナ師匠は輝いてみえた。

「そこで、以前2人のテストに使ったダンジョンが復活したとの報告があった。あそこは王都に近いし地下1階しかないから、扱いやすいし管理もしやすいという事で早速調査する事になったようだ。しかし、GMは冒険者にとって天敵だ。現れたばかりでもうしばらくあそこには現れないであろうが、わざわざ手を上げて依頼を受ける冒険者はいない。」

「なるほどね、それで俺たちなんだ。」

ラルゴが納得といったふうに頷きながら言葉を挟んだ。

「…で、ケインどうする?」

「行く！聞くまでもないだろ。いいですよねサララさん。」

そう、あそこのダンジョンはまだクリアしたわけではないのだから。
「もちろんよ。もう、前金は受け取ったし。2つ目の依頼も頑張ってくるのよ。」

「はい、頑張ります！なっケイン！」

「おうよ、どっちもどんどこいだ！」

「…説明はいらぬのか、…つまらぬのう。」

タチアナ師匠の依頼が普通の依頼である確率は天文学的に低いんだから、…とケインは心の中で答えた。

紋様術（2）（後書き）

この週末は、作品全体のメンテナンスをしていたり、次の展開を考えていたのであまり執筆は進みませんでした。

先が気になる読者の方々、申し訳ありませんでした。

紋様術（3）（前書き）

読んでいただいて、感謝・感謝です。

紋様術（3）

コツコツと足音を立てて階段を降りると、冷んやりとした空気が頬に当たる。ケインは久しぶりのその感触に戻って来た事を実感した。前に、このダンジョンに入ったときは冒険者になる前だった。ひどく緊張していたのを覚えている。あのときはラルゴと2人であったが、今回はラルゴとタチアナ師匠ともう一人、紋様術師のサイラスという男だ。金髪で碧眼、まさに絵に書いた様な美男子だがキザな言い回しを使い、ケインは苦手だと思った。

今回はこのダンジョンの制覇と共に2人のアビリティの解析作業が行われるのである。フーバー老師派からサイラスが派遣されラルゴを、リシエル老師派からタチアナ師匠が派遣されケインを、それぞれ解析する約束になっている。つまり共同戦線を張って解析作業を行って行く事になったのである。タチアナ師匠にサイラスの事を聞いたが、苦い顔で実力はあるが軟派な男だと言われた、何度も口説かれた事があるらしい。

4人でしばらく進むと曲り角があり、曲がるとパペットがいていきなり攻撃してきた。

置物の様な気配のなさに一瞬反応が遅れる。

がつん、と音がして攻撃が弾かれた。

「パペットの相手はキミたちだろう、タチアナ怪我はないかい？」

サイラスがキザったらしく言葉を紡いだ。

ケインはアビリティ”ブースト”を発動させてパペットの片足をつかみ振り回す、そのまま壁に叩きつけた。すかさずラルゴが頭を鉄棒で叩き割ると、動かなくなった。

「パペットの目は価値がある、わざわざ潰さなくてもいいだろうに。」

（よく喋る人だな……）少しウンザリしながらも礼を言う。

「さっきは有難うございます。今のはサイラスさんですよね？」

「ちとやばかった。有難う！」

2人の礼を聞き、サイラスは当然だと言っばかりに頷いた。

「我が紋様陣にかかれれば造作もない。」

サイラスの左手前腕の紋様が光っている。

「それっすか？」

ラルゴが珍しそうに聞く。

「無知だな、こんな事も知らないとは。」

「まだ新人だ、見た事がないのは仕方なかるう。」

さすがに自分が師匠役として面倒を見たことのある2人に、タチアナ師匠がフォローをいれた。

「今のは左手に描いてある紋様の力で弾いたのだ。その紋様陣は常時発動型で任意の対象を自分の周りの空間に入れたり入れなかったりができる、一般に”結界”などと言われる力だ。」

タチアナ師匠の説明は流石に専門家らしくわかりやすかった。タチアナ師匠の説明を要約すると…、

…紋様術師は長年のアビリティと印に対する研究で紋様それ自体が力を持っている事に気付く。そしてそれを発動するためにSCMが必要な事も発見した。今日までに多くの研究者の手によって、様々な紋様陣が発見されている。

しかし、一度何かに書かなければならない事、アビリティと違い獲得SCMによるので一度に使うことのできる紋様陣の発動回数は制限がある事、などの欠点もある。

「…今後は2人とも、もつとゆっくり動いてくれないかな、アビリティ発動中の紋様が見づらい。」

サイラスの発言はムツとくるものがあつたが、これも代金のうちとケインはガマンして了承した。

ラルゴと目を合わすと、割に合わね、との意志が伝わってきた…ケインは全くだと思って肩をすくめた。

紋様術(3)(後書き)

SCMの説明は、<ララカル<の街にて冒険者業に就職(2)>にあります。

紋様術（4）（前書き）

また、お気に入りしてくる人がいました、嬉しいです。
みなさま本当に感謝・感謝です。

紋様術（４）

ダンジョンの天井の明かりは場所によって強弱が異なる。比較的明るいところで紋様のチェックを受けてから、しばらく進むとまたもやパペットに遭遇した。しかし、今度は発光しながら床から出てくる出現方法だったので余裕があった。

（さっきだって、構えていれば問題なかったのにな。）

そう思いながらもケインはラルゴと攻撃の打ち合わせをした。今度はラルゴが先行する。

ラルゴはアビリティ”アニマルチェンジ”を使い小鳥になってパペットの上を旋回する。パペットはうるさそうに見上げているが手を出さない、小鳥は攻撃対象には含まれないのだろう。ラルゴは後ろに回ったところで犬に変身し右手を噛んで引つ張った。しかし、力比べではパペットの方がはるかに上の様でパペットが腕を降るとラルゴ（犬）は宙を舞った。壁にぶつかるまえにまたもや小鳥に変身して足元に向かう。人間に戻って鉄棒で踵をに一撃を加える。パペットが大きくバランスを崩したところでケインが突入し頭を砕く。陶器の様に壊れた頭部の破片の中に、砕けたパペットの目を見てサイラスがまた何かをいつてきたが耳に入れなかった。

戦闘のあとは毎回アビリティのチェックを受ける事になっている。今のラルゴの装備は武器の鉄棒を除くと、靴と短パンのみである。ケインも短パンと両手の堅手袋で指先から肘までをカバーしているのと、堅長靴で膝からしたをカバーしているのみである。結構恥ずかしい。

紋様の確認のためリュックは許可されず、荷物は両手に１つずつの袋を持ちその中にいれている。片方は自分のもの、もう片方はタチアナ師匠のものだ。ラルゴはサイラスの荷物を持っている。最初の攻撃に反応が遅れたのもそのためである。その後、ラルゴと打ち合わせをして交互にどちらかが荷物を多く持ち、片方は素早く対応で

きる様にする事になっている。

「ラルゴ、気を抜くなもつと紋様を光らせておけ。」

スケッチブックに何かを描きながら、サイラスの注文が飛ぶ。ラルゴのアニマルチェンジは変身した動物の方には紋様が浮かび上がらない、変身前と変身後にはそれが見えるので、今の消え掛かっている発光する紋様を消すなどといった様子だ。

「うゝコントロールできないんすけどねえ。」

ラルゴは困った様につぶやいた。

ケインの方もタッチアナのチェックが入る。

（…こっちはこっちで変なポーズ取らされるからなー。）

「フラフラするな！変なポーズなどと考えているのか？」

ケインは相変わらずこの人絶対に読心術のアビリティあると思った…。

紋様術（5）

タチアナのチェック受けながらケインは疑問を投げかけた。

「そういえば師匠がスケッチしてるところ見た事ないですね。」

そう、今までにタチアナ師匠がスケッチしてるところは見た事が無い。以前、ララカルの街ですらん亭を担当してくれている紋様術師がラルゴは紋様を描いているのを見た事があったが、かなり細かくスケッチ描写や文章記録をしていた。タチアナは少し間を置いて、

「…人それぞれだ。スケッチするものも、文章で記録するもの、そして私の様にイメージとして頭の中に記録する者など、な。」

「最もイメージだけで記録できるのは、タチアナと私ぐらいなものだ。最も今回は大事な報告書を書かなければならないので私はスケッチをしている、念のためだよ。」

サイラスが勝手に会話に割り込んできた上に、最後の部分を強く強調された。実際はどうかわからないが、それができるのは紋様術師として稀有な存在らしい。

「…ふむ、それよりケイン、予定通りバトルスタイルを変えてくれ、変化がなさすぎて手がかりにならん。」

「了解です。」

「なら、ケイン”あっち”でやるのか？」

ラルゴの問いに、鉄棒を荷物の中にしまう事で答えた。ラルゴのいう”あっち”とは拳のことである。

ダンジョンを前に進むと足音が聞こえてきた、規則的で硬質な足音が。

そちらに気を取られていると、

「ケイン！後ろ！」

ラルゴの警告に振り返る。

後ろでモンスター出現の発光現象が起きていた、しかも2つ。

「前任せた！」

そういつて後方に移動する。すると2体の横で、さらにもう一つの発光現象が起きる。

「モンスターの発生率が上がっているのか。危なくなったら下がれ。」

タチアナ師匠が叫ぶ。

（…キラキラ蟹のときの鉄は踏まない、ラルゴの方が片付くのを待つ、生き残ることを優先だ。臆病でいい。）

きつとサイラスに、みつともない戦いだったと言われるであろう戦い方をケインは選択した…。

紋様術（6）

ケインは最初に発現した2体のパペットに向かう。アビリティ”ブーラスト（身体強化）”を使い一気に懷に飛び込みすり抜ける。

2体ともほぼ人間と同じ体型でケインよりは背が高い。振り向くと2体はこちらに、1体はタチアナ師匠の方へ向かった。

タチアナ師匠は攻撃的な紋様陣は用意していないといったが、サイラスのような防御の紋様を実装しているといった。なので大丈夫だと判断し意識からはずす。

（2体も同時に相手にするんだ、無駄な思考はいらない）

ケインはケン・ポーと呼ばれる戦闘術を教えてくれたハーティアの言葉を思い出しながら構えた。

（君は武器を使った戦闘に全くセンスがない、キレイサッパリ清々しいくらいに！）これを聞いたときは自覚があったので傷ついた、ほっとけ…。

風を切って振り下ろされる腕を次々とよける。

（だが、サララの鉄球を見事によけるあの動きは、そう、私に近いものを持っていると感じたんだ！だから君に教えようと思う。）これを聞いたとき、新聞は間に合ってます 社と1年は解約しないって契約したので断ります、と言いそうになった…。

いきなり回し蹴りがきた、コマの様に連続回転して追尾してくる。くぐり抜けざま、軸足を引っ掛け転ばす。

（きっとこれを覚えれば私と同じ高みに登れる、そう、サララの鉄球から逃れられるんだ！）チョットだけ惹かれるものがあつた、あの鉄球相手の訓練は正直命の危険が…連続の振り下ろしを2体同時にしてきた…必死にかわす。

「目の前に敵がいるのにばけつとするな！馬鹿弟子！」

（…おっと、逆に余計なことばかり考えていた。イカン！仕切り直しだ！）

ケインはパペットの攻撃の合間をぬって独特の構えをとった！

そう、ケン・ポーの…。

紋様術（7）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

紋様術（7）

ハーティア…すずらん亭随一の实力者で”姿隠し”のアビリティ持ち…の言葉がよみがえる。

ケインはアビリティの発動を停止して前に歩を進める。

（…冗談はこのくらいにしてケン・ポールの真髓を伝えるますね、ケインあなたは無になりなさい）

パペットの攻撃をかわす、かわす…

（無に攻撃が当たりますか？当たりませんね…）

かわす、かわす…

（紋様の光が目立ちますからアビリティは禁止。ケイン、無になりなさい。街での鬼ごっこの特訓もこのためです。）

かわす、かわす…

（”姿隠し”を持つ私だけが極めることのできたこの技は、あなたに何をもたらすのでしょうかね。）

”姿隠し”をしながら人混みを通ったとしても決してぶつかからない足さばき、体さばき…

（無^{なし}が授ける有^{あり}…）

かわす、かわす…

（かわす、かわす、かわす…、僕には当たらない、僕は無…）

かわしながら誘導する、2体のパペットが1つに重なる位置に…

（無から有に！）

アビリティを発動して体当たりをかます！2体とも壁に激突した。

こきん、こきんとラルゴの振るう棍棒がパペットの頭部を砕く。どうやらあちらを片付けてきたらしい。

「助かったよ、マジやばかった！」

体が震えている、どうもいつもと違う筋肉を使った様で、あちこちプルプルしている。

「結構、1人でいけそうだったじゃん！」

「無理無理！」

「いや3体でもいけ…」

「2人とも整列！」

勝利に湧く2人に厳しい口調の声がかけられた。

「立ったまま動くな！スケッチがしづらい！」

「片足上げる、片手を地面につけ、上をみる！」

それぞれの担当の紋様術師が注文をつける。

「ハードだよなこの仕事…」

ため息をつきながらラルゴがぼやく…。

ケインは頷きながら、ふと別のことを考えてた。

（ハーティアさん実力は随一だけとサララさんには頭上からないから、ずずらん亭最強はサララさんだよな。）

変な格好でプルプルしながら…ケインはそんなことを考えていた。

紋様術（8）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

紋様術（８）

「…も、…ダメ。ま、だ、で、す。か？」

ケインはあれから１０分近く変なポーズを決めていた。

「仕方が無い、横になれ…止めるな！アビリティは発動させておけ！」

まだ、続々らしい。タチアナ師匠の真剣な目で自分の体を観察しているので、文句も言えない。

先にチェックが終わったラルゴが近づいてきた。サイラスさんもある。

「ケイン、いつの間にあんな技教えてもらったんだ？」

「ハーティアさんは時々しか来れなかったけどこの技は１月ほぼ毎晩特訓して。ラルは夜、ルークさんとどっかいったじゃん。」

「まあ、俺の方も…ね。」

ニヤリと笑ったラルゴは魅力的で女の子ならどきりとしただろう。きつと何か夜用の変身でも練習していたに違いない。

「…もういいぞ、サイラス、すまぬが結界をはってもらえるか？」

「君のためなら、なんでもするさ。」

そういつてサイラスは地面に紋様を描く。タチアナ師匠は敷物を持つてその中に入り、座って目を瞑る、何かをブツブツいつている。

「イメージ固定のために瞑想に入ったようだ、１時間くらいはこのままだ。君達も休んでいるがいい。警戒は怠るなよ！」

２人背中合わせで座り、警戒しながら一休みする。

「サイラスさん！俺のアビリティ、何かわかりました？」

ラルゴがサイラスに問いかける。

「もう一つの方が何かはまだわからない。アニマルチェンジの印とそれ用の紋様が強すぎて、もう１つがよく印が見えないのだ。しかし、ことからアニマルチェンジを授けてくれた神より下位の存在の印と推測できる。」

「神様に上下があるの？」

「神に上下があるかはわからないが、神に与えられたと思われるアビリティと精霊などに与えられたアビリティとでは力加減に差があると言われている。まだ、実証例がないので推測ではあるが紋様術師の中では通説となつている。君たちは当然知らないと思うがね。」

「タチアナ師匠はあまりそんな事教えてくれないからなあ……」

「タチアナは不確実な事を伝える性格じゃないよ……、研究者としては誠実だからね。それより、ケイン、君は本当に紋様術師泣かせだね。」

「そうなんですか？」

「タチアナは言わないだろう、そんなこと。実際私もこれ程厄介な印は見た事がない。一見ただのブーストの印のようだが、ライントレースが脈動する上に、微妙に変化する。おそらく、これを解析できるのはタチアナくらいだろう。よく、アビリティの安定化が成功したもんだ。」

「……やつぱり。僕の描いたのタチアナさんだったんだ。」

以前、ララカルで街で紋様をリライトしてくれた紋様術士があつてくれなくなつたのでそうなんじゃないかとおもっていた。

ケインは瞑想が終わつたらその事を聞こうとおもつた。

紋様術（9）（前書き）

いつも読んでいただいて感謝・感謝です。

紋様術（9）

サイラスさんは、話してみると気さくでこちらの問いにもしつかり答えてくれた。自己主張が強い、そのことを認識してさえいれば結構付き合いいやしいかもしれない。ケインは自分のサイラスさんへの苦手意識がなくなっていることに気がついた。第一印象は当てにならないものだ。

（僕、人を見る目はまだまだだよな）

そんなことを考えながら3人で話をしていると、急にタチアナ師匠が立ち上がった。思ったより早い。

「ケイン、メンテナンスをするぞ、防具を外せ。」

「えっ、ここですか？」

「すぐ済む、サイラス！チョット……」

サイラスさん呼び寄せて耳元でこそこそ話す。

「なっ！……本当か？」

「……あくまでも理論上の話しだ。」

「ラルゴ！至急帰るぞ！」

「えっ、ケインたちは？」

そう、今日だけでダンジョンを攻略する必要はないので一緒に変えればいいのだ。

「ケインにはメンテナンス後、一戦してもらいたいのだ。こちらもすぐ帰るから先に行っておれ。」

「では、タチアナ先にいかせてもらう。」

「結果は知らせてくれ。」

「もちろんだ、さあ、ラルゴ！何をグズグズしている。」

「あっ、出口方向にパペットが！」

「どけ！」

サイラスが左手を振るうと、パペットが粉々に砕けた。

サイラスは居ても立っても居られない様子でラルゴの手を引っ張

つていった、あつという間に。

「あれ？ナニ？」

「衝撃波の紋様陣を実装しているらしいな。あれは高レベルの紋様陣だ。それより、早く横になれ！」

タチアナ師匠は袋に入っていた道具を全て取り出して並べた。

「…まさかとは思うけど、上書き（リライト）？」

「せっかくサイラスを追い払ったのだ。しかもここなら誰にも見られることはない。」

タチアナ師匠の顔には今まで見たことの無いような、満面の笑みが浮かんでいた。

（師匠、本当に綺麗…、でも僕、ピンチな予感がする。）

ケインは自分の悪い予感の的中率の高さを恨めしく感じていた。

紋様術（10）（前書き）

今朝はログイン出来なくてアップできませんでした。申し訳ありません。

そして、祝！pv1万突破！

感謝・感謝の気持ちがありません！ありがとうございます！

紋様術（１０）

紋様を描くタチアナ師匠は本当に綺麗だと思う。ケインは床に寝転がって紋様を描かれている間、そんなことを考えていた。

（一生懸命な人って惹かれるんだよね…）

以前より、タチアナ師匠は紋様を描くとき嬉しさが表情に現れるようになっていて。おそらく、一度紋様術師としての仕事を取り上げられたため、紋様を描くことの喜びを再確認したためだと思う。

「ケインよ、一つ問う。お前にとってアビリティとはなんだ？」

「…いきなりですね。」

「私は紋様術に人生をかける。お前はとうんだ？アビリティはお前にとって人生をかけるだけのものか？」

しばしの時間をおいてから答えた。

「…僕、アビリティが嫌いでした。一部の人にしか与えられない神の恩恵なんて不公平だって。なんで、…父さんを助けるために僕に出来ないんだって。それで、そんなことを考える自分自身が一番嫌いでした。」

言葉がまとまらない、と感じつつも言葉はとまらない。

「僕、強さが欲しかったんです。他の誰かに与えられたものではなく、自分自身のちからでの強さが…。でも、アビリティを使えるようになって、ともかく先ずはそれで強くなるうってもって、でもハ―ティアさん達にはまだ全然かなう気がしなくって、でも持つてない人より強くなってるってこと得意になったり、…ごめんなさい。うまく言えません、僕の持っているアビリティのことなのに。」

「それだけで十分だ、今は。」

タチアナ師匠の顔は見えなかったが、声は喜んでいるような気がした。

「さて、もうすぐ終わる、新しい紋様の力をギャラリーに見せてあげろ。」

周りに集まっているパペット達をギャラリーに見えるのは師匠だけだと思っケインであった。

紋様術（11）（前書き）

p v 1 万突破を記念して感謝・感謝の感謝祭を行いたいと思います！
この作品の王都の名前を募集します…。

一番作品の雰囲気にあったものを採用させていただきます…。一応
語尾に作者の考えた2文字くらい追記させていただく所存です。

締め切り、11月6日零時までとさせていただきます…こんなこと
していいのかな？

紋様術（１１）

タチアナ師匠から新しい紋様のレクチャーを受けてからパペット達と対峙した。

すでに慣れてきた相手なので、かもしれないが、

「まあまだな…、しかし負荷が小さすぎたか？」

「ゼーゼー、５体同時で負荷小さいってどんだけ？」

タチアナ師匠に答えると、そのまま床に伸びてしまう。酷使に耐えきれず、身体がプルプルを通り越してガタガタしている。

「よくぞ説明だけで使いこなせたものだ。やはり部分制御はお前に相性がいいようだ。」

タチアナ師匠のレクチャーによると、ブーストの力の一部だけを強化（？）する紋様追記をしたのだという。

「“強くなる”のために紋様を描くのではない。紋様の主要な機能は、授かった力を”拘束”することだ。制御出来ないアビリティは暴走することさえあり得る。紋様を描くことでそれを制御し安定化を促す、その結果行えることが多くなるので、“強く”なることができるのだ。今回は、身体強化の戒めを”俊敏性”と”耐久性”のみ緩めたわけだ。飛躍的にスピードがアップしただろう？」

確かにお陰で、相手にまともな攻撃をさせずに撃破できた。身体はボロボロだが。

「まあ、今日はこのくらいで許してやろう。帰るぞ。」

タチアナは、どこぞのいじめっ子のようなセリフを吐いて帰り支度を始める。

「はい、あつサイラスさんには何をいったんですか？」

「ラルゴのもう一つのアビリティ解析のヒントをな。」

「やっぱり！師匠はもうわかったんですか？ラルのアビリティ。」

「さあ、サイラスの結果を…！」

出口方向に歩き出したところ、２人の足元に変な紋様陣らしきもの

が浮かんだ。

「いかん！トラッ」

師匠の叫びが中断されるのを聴きながらケインの意識は途切れた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6066x/>

冒険者の心得その1生きるべし！

2011年11月2日13時07分発行